

BUTSUBARU SENNINZUKA

仏原千人塚古墳群

県営担い手育成基盤整備事業都野東部地区
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書VI



2 0 0 2

久住町教育委員会
大分県教育委員会

仏原千人塚古墳群



序 文

九州本島の最高峰である久住山・火船山の南麓に位置する久住町は自然環境に恵まれた高原の町であります。このような町で平成5年度から始まった県営担い手育成基盤整備事業に伴い数多くの遺跡の存在が確認され、発掘調査により出土した遺物の量やその質の高さはこの地区の重要性を雄弁に物語るものであります。

平成8年度の調査では竪穴住居約300基と集団墓が検出され古墳時代前期におけるこの地域一帯の拠点集落と考えられる原山遺跡が調査されました。これに隣接して発見された前方後方墳・前方後円墳各1基と木棺墓・石棺墓約50基の集団墓からなる本報告書の仏原千人塚古墳群は、原山遺跡とともにこの時期の有力な集落全体のあり方を示す重要な遺跡として全国的にも注目されました。

久住町は大分県教育庁文化課を始め多くの指導助言を求め、関係各機関のご協力のもと仏原千人塚古墳群について全てを保存し、後世に伝えることとしました。

本書が文化財保護の一層深いご理解とご協力を賜る資料として、また学術資料として多くの人々に広く活用されることを望む次第であります。

最後になりますが、当初の試掘の段階から本調査、整理作業、報告書の刊行に至るまでご指導ご協力いただいた大分県教育庁文化課の皆様をはじめ関係各機関、発掘調査を手伝っていただいた各地区の皆様にお礼申し上げます。

平成14年3月20日

久住町教育委員会教育長

志 賀 長 生

例 言

- 1 本書は、平成8年度県営担い手育成基盤整備事業都野東部地区に伴い実施した仏原千人塚古墳群の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は大分県農政部の委託を受け久住町教育委員会が実施し、大分県教育庁文化課および竹田・直入地方振興局の協力を得た。
- 3 遺物の整理と報告書の作成は久住町教育委員会の委託を受け、平成11・12年度に大分県文化財文化財資料室で行った。
- 4 遺跡・遺構の実測と撮影は調査担当者の宮内のほか、坂本・山中・渡部・隈浦・吉田・辻田・小沢・若杉・佐藤が当たった。
- 5 遺跡・遺構の製図は宮内が、遺物の実測・製図は宮内・坂本他が行った。
- 6 本書で使用した方位は全て磁北である。また、竪穴は1/60、墓は1/20、土器は1/3又は1/4、石器は1/3、鉄器は2/3を原則とした。
- 7 本書の執筆・編集は宮内が行った。
- 8 出土遺物は久住町教育委員会で保管している。

目 次

	頁
第Ⅰ章 序章	1
1 調査の経緯	1
2 調査組織の構成	1
3 遺跡の立地と環境	2
第Ⅱ章 調査	
1 調査の概要	8
2 仏原千人塚1号墳	8
3 仏原千人塚2号墳	19
4 集団墓と土壇墓	27
5 竪穴	34
第Ⅲ章 総括	45

挿 図 目 次

第1図	仏原千人塚古墳群の位置と周辺の遺跡	4
第2図	仏原千人塚古墳群と周辺の遺跡	5・6
第3図	仏原千人塚古墳群遺構配置図	9・10
第4図	仏原千人塚1号墳墳丘測量図	11・12
第5図	仏原千人塚1号墳第1トレンチ実測図	14
第6図	仏原千人塚1号墳第2トレンチ実測図	15
第7図	仏原千人塚1号墳第3トレンチ実測図	16
第8図	仏原千人塚1号墳第1・2トレンチ出土土器実測図	17
第9図	仏原千人塚1号墳第3トレンチ出土土器実測図	18
第10図	仏原千人塚2号墳墳丘測量図・遺構配置図	20
第11図	仏原千人塚2号墳第1トレンチ実測図	21
第12図	仏原千人塚2号墳第2トレンチ実測図	22
第13図	仏原千人塚2号墳第1トレンチ出土土器実測図	22
第14図	仏原千人塚2号墳A号墓実測図	23
第15図	仏原千人塚2号墳B号墓実測図	24
第16図	仏原千人塚2号墳C号墓実測図	25
第17図	仏原千人塚2号墳D号墓実測図	26
第18図	仏原千人塚集団墓分布図	27
第19図	仏原千人塚集団墓1・2・5・6号墓実測図	29
第20図	仏原千人塚集団墓6号墓出土土器実測図	30
第21図	仏原千人塚集団墓7～10号墓実測図	31
第22図	仏原千人塚1号土壌墓出土鉄剣実測図	32
第23図	仏原千人塚集団墓11・13・48号墓、1・2号土壌墓実測図	33
第24図	仏原千人塚1号竪穴実測図	34
第25図	仏原千人塚1号竪穴出土遺物実測図	35
第26図	仏原千人塚2号竪穴実測図	36
第27図	仏原千人塚2号竪穴出土遺物実測図	37
第28図	仏原千人塚3号竪穴実測図	38
第29図	仏原千人塚3号竪穴出土遺物実測図1	39
第30図	仏原千人塚3号竪穴出土遺物実測図2	40
第31図	仏原千人塚4号竪穴実測図	41
第32図	仏原千人塚4号竪穴出土遺物実測図1	42
第33図	仏原千人塚4号竪穴出土遺物実測図2	43
第34図	仏原千人塚5号竪穴実測図	43
第35図	仏原千人塚5号竪穴出土遺物実測図	44
第36図	仏原千人塚6号竪穴実測図	44
第37図	仏原千人塚1号墳復原図	46
第38図	仏原千人塚2号墳復原図	47

図版目次

トピラ 仏原千人塚古墳群と都野原田遺跡・原田第Ⅲ遺跡(カラー)	
1号墳と周辺の遺構、1号墳出土土器、2号墳A号墓出土土器(同)	52
仏原千人塚古墳群全景、1号墳と周辺の遺構、2号墳と周辺の遺構	54
1号古墳全景、同周溝Iトレ、同周溝IIトレ	55
1号墳IIトレ土器出土土器状況、同土層堆積状況、同IIIトレ	56
1号墳IIIトレ遺物出土状況、1号墳前方部周溝内木棺墓、同土層堆積状況	57
2号墳全景、同Iトレ周溝首石転落状況、同墓石と土層堆積状況	58
2号墳周溝と付属A・B号墓、同A・B号墓・A号墓全景	59
A号墓石組枕、同副葬・供獻土器、B号墓全景	60
C号墓、集団墓全景、同1号墓	61
集団墓2号墓、同5～11号墓、同5・6号墓	62
同7～9号墓、同10・11号墓、同13号墓	63
1号竪穴全景、同遺物出土状況、同完掘状況	64
2号竪穴遺物出土状況、同完掘状況、3号竪穴遺物出土状況	65
3号竪穴遺物出土状況、同完掘状況、1・2号土槨墓	66
1号土槨墓鉄剣出土状況、4号竪穴遺物出土状況、5号竪穴完掘状況	67
1号墳周溝出土土器、2号墳周溝出土土器、A号墓出土土器	68
1号竪穴出土遺物、2号竪穴出土遺物	69
3号竪穴出土遺物	70
4号竪穴出土遺物、5号竪穴出土土器、1号土槨墓出土鉄剣	71

第I章 序 章

1、調査の経緯

直入郡久住町は、大分県の内陸の南西部に位置し九州の屋根と称される九重山系の南麓から阿蘇外輪山の北東の一面を占める山と高原の町である。町内の水系は、町のほぼ中央を北西から南東に延びる小倉峠により大分川支流の芹川水系と人野川支流の稲葉川水系に二分される。水田は町の南部の各水系に沿って展開しているが、起伏の激しい地形から不整形な圃田や追田が卓越していた。このため、農業基盤の整備と中核農家育成を目的とした県営担い手育成基盤整備事業都野東部地区が平成5年度から策定・実施されることとなった。

事業の区画は約1haの大規模水田の整備を標準とし、これに用排水路や幅7mの基幹道路やその支線道路を敷設するなど、本地域始まって以来の大規模開発事業であった。さらに平成6年度から同事業都野西部地区も並行して計画され、年間100haを超える開発が数年間継続して行われることとなった。一方、この開発に伴う埋蔵文化財の分布・試掘調査の結果、当初の予想を大幅に覆す多数の遺跡の存在が明らかとなり、圃田整備事業と遺跡の保護・保存との調整が緊急の課題として浮上した。このため、大分県文化課では関係各機関との調整や本調査の実施にあたり全面的協力と指導を行うこととした。また、久住町教育委員会においてもこれら遺跡の保存・保護のため、これまで配置していなかった埋蔵文化財担当職員1名を平成9年度から採用し対応している。

平成6年度は大字仏原の石田遺跡と市第1遺跡の2遺跡の本調査が行われ、平成7年度には大字有氏の板切第I～IV遺跡、大字仏原の市第II～IV遺跡・尾首遺跡・小原田遺跡・仏原第I～III遺跡の合計12遺跡の本調査が実施された。平成8年度は都野原田遺跡・仏原千人塚古墳群・原田第III遺跡とトグウ遺跡・市第V遺跡が都野東部地区に伴い、上屋敷遺跡・小路遺跡・板切第V遺跡が都野西部地区に伴って各々本調査された。これらの遺跡は弥生時代から中世に及ぶもので遺跡の集中度と継続性・質の高さは県下においても群を抜く。また、その中でも注目されるものは弥生中期～古墳前期の集落と墳墓及び古代の官衙関連遺跡と言えよう。

仏原千人塚古墳群の調査は平成8年9月から開始し、同年12月に終了した。本遺跡は、前方後方墳1基・前方後円墳1基を主とし、木棺・石棺墓計5基からなる集団墓や、2基の古墳のくびれ部周辺に位置する竪穴6基の遺構から構成される。これらの遺構はいずれも古墳時代前期前半に形成されたもので、大分川上流域では最も古い古墳群であると同時に、古墳群形成の中心的集落跡である都野原田遺跡（竪穴250基以上）が正に口と鼻の距離の位置に存在し、両者が並行して本調査されたことは県下初であった。そして、様々な出土物や周辺の遺跡も含め本地域が直入郡の中心地（奥津城）であったことが判明した。

このような遺跡の重要性からマスコミが大きく報道するところとなり、文化財関係団体や地元学校等の現地見学が相次ぐと共に遺跡保存の強い要望が出された。これを受け県文化課では久住町教育委員会と県農政部の協議を持ち、幸いにも地元地権者の承諾や関係各機関の協力により工法変更による保存処置が取られることとなった。以上の経緯をへて、仏原千人塚古墳群の調査は無事終了したが、これは地元作業員の皆様や関係各位、各機関の協力と支援の賜物であることを明記し、深甚の感謝を申し上げます。

2、調査組織の構成

調査主体	久住町教育委員会
調査地区	久住町大字仏原(字南)
調査期間	平成8年9月5日～平成8年12月25日
調査指導	横山 浩一（日本考古学協会会長 現福岡市博物館顧問） 賀川 光夫（大分県文化財保護審議会会長 故別府大学名誉教授）

後藤 宗俊 (同委員 別府大学教授) 小田富士雄 (同委員 福岡大学教授)
 下條 信行 (愛媛大学教授) 甲元 高之 (熊本大学教授)
 田中 良之 (九州大学教授) 武末 純一 (福岡大学助教授 現教授)
 溝口 李司 (九州大学助教授) 坂本 嘉弘 (大分市歴史資料館主幹)

現大分県文化課主幹

調査員 清水 宗昭 (大分県文化課主幹兼理蔵文化財第一係長 現参事)
 宮内 克己 (同理蔵文化財第一係主査 現大分県立歴史博物館主幹研究員)
 田中 裕介 (同主任 現主査)
 渡辺 桂司 (同嘱託) 櫻浦 幸徳 (久住町教育委員会嘱託 現社会教育課主任)

調査事務 鷺司 大乗 (久住町教育委員会教育長 平成6～10年度)
 志賀 長生 (同 同 平成11～)
 内柳 勇 (同 社会教育課長 平成8年度)
 竹下 善治 (同 同 平成9～12年度)
 川越 賢一 (同 同 平成13年度)
 麻生 宗洋 (同 社会教育係長 平成8～10年度)
 後藤 光博 (同 同 平成11～12年度)

調査補助 辻山淳一郎・小沢 佳憲 (九州大学大学院生)、吉田 和彦 (奈良大学大学院生)、
 若杉 竜太 (熊本大学大学院生)、是田 教 (福岡大学大学院生)、
 佐藤 勇二 (別府大学生)、今堀屋武行・相良 大輔 (福岡大学生)、
 吉岡和成 (熊本大学生)

調査協力 石野 博信 (徳島文理大学教授)、西谷 正 (九州大学教授)、岸本 義彦 (文化庁)、
 木村茂多郎 (大分市歴史資料館長)、金 宰賢 (九州大学助手)、大分県農政部、
 大分県竹田直入地力振興局

3. 遺跡の立地と環境

(1) 自然環境

久住町は大分県の西部に位置し、九州本島の最高峰である久住山・大船山(1,787m)など九重連山とその南側山麓を占める山と高原の町である。その東は直人郡直入町と接し、西は熊本県阿蘇郡小国町と、南は竹田市と、北は玖珠郡九重町と大分郡庄内町と各々境を接する。また、肥後藩の参勤交代道路であった肥後往還と竹田と日田を結ぶ日田往還の交差点にあたり、古来より九州島の東西南北を結ぶ内陸交通の要衝地であった。

優れた景観と希少な植物の存在から九重連山と高原は「阿蘇くじゅう国立公園」として保護されており、集落の多くは南側から東側山麓に形成され町の人口は約4千人を数える。その植生は山地・高原・集落周辺の各々により異なる。山地では「大船山のミヤマキリシマ」と「久住山のコケモモ群落」が国指定天然記念物として特に良く知られる植物であるが、黒岳一帯は九州では数少ないブナ・オヒョウ・ミズナラ等の原生林に覆われていると共に、イヌワシの営巢地としても貴重である。高原や山麓には数千haに及ぶススキの群落や草地が広がり、集落とその周辺には農耕地とスギ・ヒノキ等の人口林が展開する。

町内は、九重火山群や阿蘇火山から噴出した火山灰・火砕流等の火山噴出物によって覆われている。比較的平坦な丘陵部ではローム層・アカホヤ層・九重火山群起源の各種火山灰層・阿蘇起源のクロボク層が層位的に堆積している。この中で九重火山群起源の火山灰層は7枚を数えるが、一部を除きその噴出年代や分布範囲などについては明らかにされていない。当地域の気候は、夏季に涼しく冬季は厳寒であり気温の較差が大きい典型的山地型である。町の中心である久住の年間平均気温は12.9℃で、これは県都の大分市に比べ約3℃低い。年間降水量は1993ミリと県下でもやや多いが、九重山系一帯は年間約2500ミリもの多雨地域にあたり、豊富な雨水は山

麓に数多くの湧水と小河川を生じさせている。そして、県下第一級河川である大野川や人分川及び、筑後川の源流の一角を形成する。

このような自然環境のもと、農業・牧畜・林業・観光が町の基幹産業として営まれ、住民の主体を占める農家では稲作を中心に畜産・林産・施設野菜・花卉栽培などを組み合わせた複合経営が行われており、一戸あたりの経営規模も県平均を上回っている。

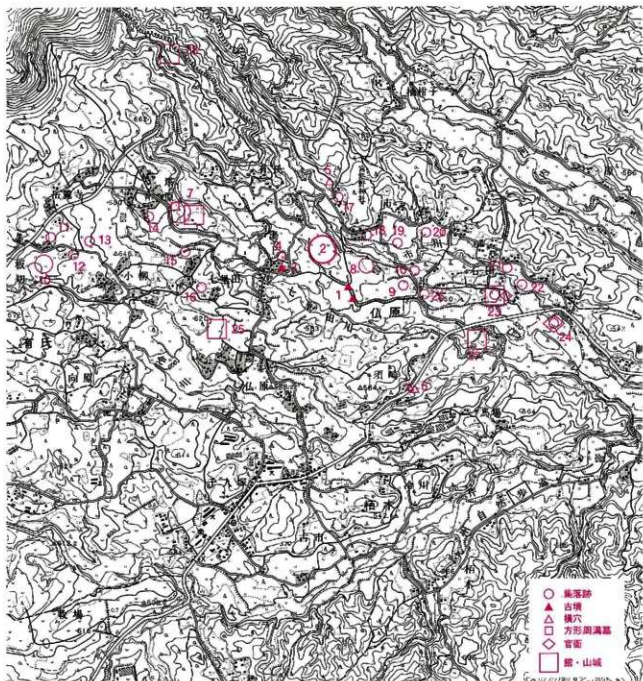
(2) 歴史的環境

昭和59年発行の『久住町誌¹⁾』では、旧石器～古墳時代の遺跡として合計30箇所が示されている。その多くは表面採集によるもので、発掘調査例は縄文時代のコウゴー松遺跡²⁾と古墳中期の湯ノ上古墳³⁾の2例に過ぎない。その後、平成4年度の『大分県遺跡地図』には46遺跡が記載されているが、各遺跡の詳細については不明な所が多いままであった。しかし、近年の圃場整備に伴う調査により、30箇所を越える遺跡の存在が確認されている。

この中で旧石器時代に属するものとしては、大字白丹の赤土板遺跡で思峠石製の剥片尖頭器と剥片各々1点が採集されているのみである。縄文時代草創期から中期の遺跡もやや少なく、白丹の吉原遺跡で早期の押型文土器が、東に隣接する直入町前田遺跡から草創期の瓜形文土器や早期の押型文土器が、三反田遺跡からは押型文土器が出上している。縄文前期から中期の遺跡は大字久住のコウゴー松遺跡や直入町の三反田遺跡⁴⁾・日向塚遺跡⁵⁾・前田遺跡⁶⁾などで土器が若干認められるが、後期以降になると遺跡も多く認められるようになる。代表例としてコウゴー松遺跡がまずあげられる。この遺跡からは後期前葉の中津・福田K式など瀬戸内系土器と九州由来の阿高式系土器及び小池原上層式土器、両者の折衷系であり本遺跡出土の一群を標識とするコウゴー松出土土器、各種の石器が出上した。これらの土器は地域間の土器の並行関係を示すだけでなく文化の波及とその変容を物語る資料として重要性は高く、県下における後期の代表的遺跡の一つに上げられている。また、最近の調査では石田遺跡⁷⁾や都野原田遺跡⁸⁾などからは少量ながら後期から晩期の土器が出上しており、晩期終末の土器の中には東日本系土器も認められる。

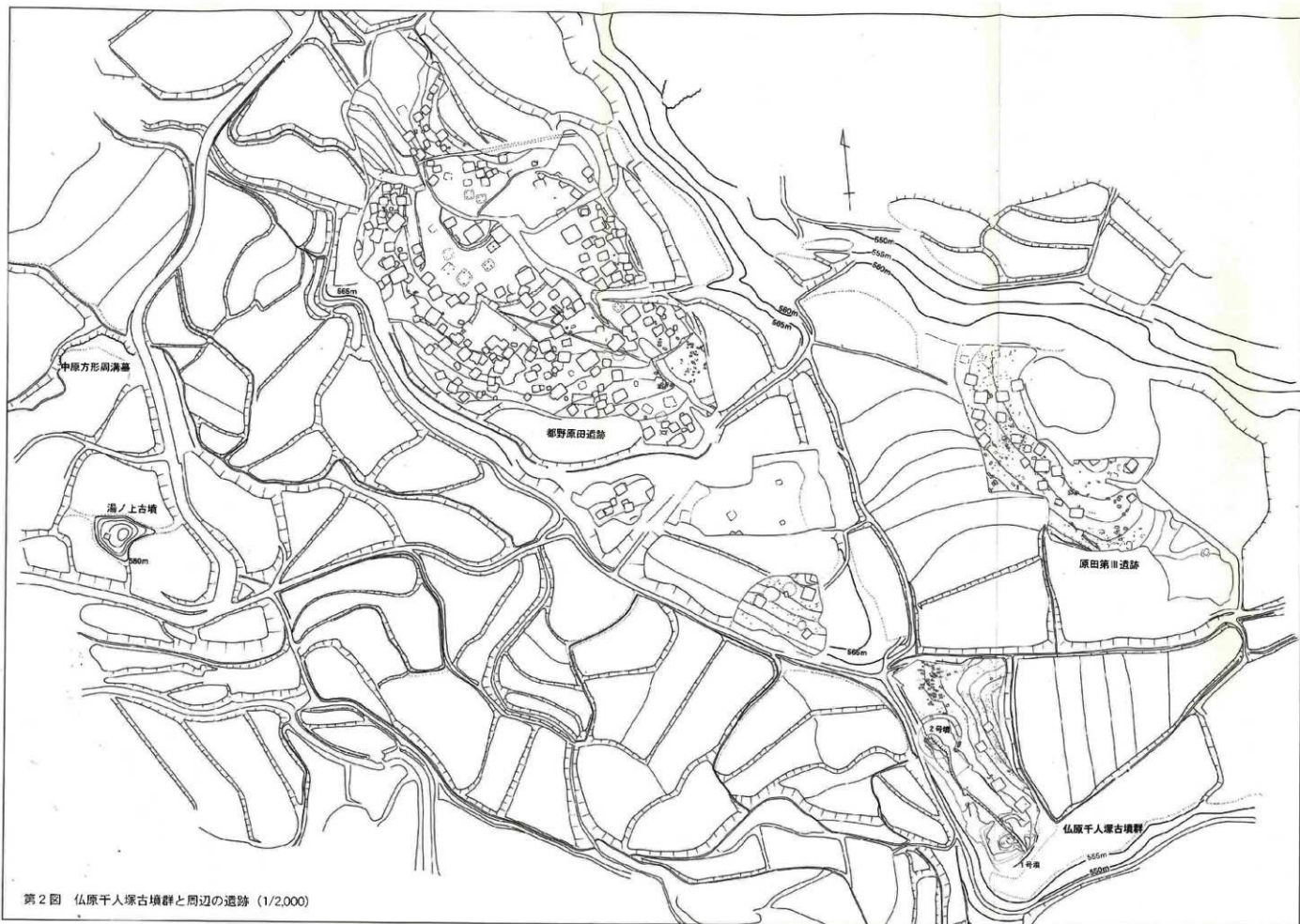
弥生時代になると遺跡は急増する。前期に属する竪穴住居跡は未検出ではあるが、石田遺跡・都野原田遺跡などにおいて当該期の土器がある程度出土しており竪穴が今後検出される可能性は強いものと思われる。中期の竪穴は広範囲に分布し都野原山遺跡⁹⁾・トグウ遺跡¹⁰⁾・小城原遺跡¹¹⁾・小路遺跡¹²⁾・上塊敷遺跡¹³⁾等において一時期2棟前後をセットとする竪穴が散在しながら検出されている。これらは分散的小規模集落とも見なされるものであるが、一方では竪穴跡のように中期中頃から後半の竪穴十数棟が確認され中核的集落の存在も明らかになりつつある。また、各遺跡から竪は確認されておらず、形成されていたとしても集落の跡に部は少数存在するに過ぎないことが予想される。また、弥生中期前半までは下城式土器が主体を占めるようであるが、北部九州系や鹿系土器も少なくない。そして、中期後半になると須玖式系甕・壺・高環・鉢や黒髪式系甕などが中心となり在系土器は非常に少なくなる。弥生後期前半から中頃の集落は小城原遺跡や石田遺跡などで確認されているが、分散的小規模集落が多いようであり、中核的集落跡の存在もはっきりしない。なお、この時期の遺物で注目されるものとして石田遺跡の後期切畑の住居跡から出土した小型韓鏡がある。

弥生後期後半になると集落遺跡の増加と集伴化が顕著となる。一時期2棟前後の小規模集落跡としては板切第Ⅲ～Ⅴ遺跡¹⁴⁾・市第Ⅳ遺跡¹⁵⁾・トグウ遺跡¹⁶⁾・花立遺跡¹⁷⁾・上城遺跡¹⁸⁾などが挙げられ、十棟前後の竪穴からなる中核的集落跡としては都野原田遺跡¹⁹⁾・原田第Ⅲ遺跡²⁰⁾・小城原遺跡²¹⁾・板切第Ⅱ遺跡²²⁾の4遺跡が存在する。都野原田遺跡や小城原遺跡などの中核的集落跡では竪穴の計画的配置とこれを強制する権力の存在を読み取ることが可能である。また、各遺跡の竪穴の数はこの時期からの人口増加を示し、再び増加する外系土器と併せてここに時代変化の始まりが映し出されていると理解されよう。そして、古墳時代前期前半に至り都野原田遺跡の集伴化現象は一層進み、40棟を越える竪穴が形成され同遺跡は旧直入部全体の大規模拠点集落へと発展する。また、古墳前期前葉には当地域最古の仏原千人塚1墳(前方後方墳)が、中葉には同2方墳(前方後円墳)が都野原田遺跡の南側隣接地に造営される。さらに、両遺跡からは約50基からなる集団墓も検出されており、同時期の集落と墳墓が一体となって示されたことも重要な成果である(第2図)。



第1図 仏原千人塚古墳群の位置と周辺の遺跡 (1/2.5万)

- | | | |
|-------------------|-------------------|-----------------------|
| 1. 仏原千人塚古墳群 | 11. 板切第Ⅲ遺跡 (※) | 20. 市第Ⅳ遺跡 (弥・中世) |
| 2. 都野原田遺跡 (弥～古) | 12. 板切第Ⅳ遺跡 (※) | 21. 中殿A遺跡 (奈～平) |
| 3. 溝ノ上古墳 | 13. 板切第Ⅴ遺跡 (※) | 22. 中殿B遺跡 (※) |
| 4. 中原方形周溝墓 | 14. 尾根遺跡 (※) | 23. 上城遺跡 (弥～古、奈～平、中世) |
| 5. 小竹横穴墓 | 15. 上七里田遺跡 (※) | 24. 石田遺跡 (弥・奈良) |
| 6. 須崎横穴墓群・石棺 | 16. 上屋敷遺跡 (※) | 25. 小路遺跡 (中世) |
| 7. 小城原遺跡 (弥～古・中世) | 17. 市第Ⅰ遺跡 (奈～平) | 26. 尾首遺跡 (奈～平) |
| 8. 原田第Ⅲ遺跡 (弥～古) | 18. 市第Ⅴ遺跡 (古・奈～平) | 27. 三船城跡 (中世) |
| 9. トグウ遺跡 (弥～古) | 19. 市第Ⅲ遺跡 (奈～平) | 28. 山野城跡 (※) |
| 10. 板切第Ⅱ遺跡 (弥～古) | | |



第2図 仏阪千人塚古墳群と周辺の遺跡 (1/2,000)

古墳時代中期になると丘陵上に立地する集落跡は激減し、僅かに都野原田遺跡で竪穴敷基が確認されたに留まる。この時期以降の集落は、市第V遺跡などに示されるように市川周辺の河岸段丘部に点状して分布するようであり、大規模集落跡が再び当地域において出現することもない。しかし、中期から後期の墳墓としては都野原田遺跡の近辺に湯ノ上古墳（円墳）や小竹横穴墓の存在が確認され、周辺では須崎石棺・横穴墓群や長湯横穴墓群が存在しこの一帯が引き続き旧入都の中心を占めていたことは疑いない。その後、7世紀後半から奈良～平安前期にかけて市川の河岸には石山遺跡、中城遺跡、上城遺跡、市第I・Ⅲ・V遺跡、尾首遺跡などが出現し、東に隣接する直入町でも日向塚遺跡が確認・調査されている。

石山遺跡からは7世紀末から奈良時代初め頃の大型掘立柱建物4棟、2×2間の小形掘立柱建物2棟、竪穴住居跡4基とこれらを区画すると考えられる小溝が検出された。これらの遺構は竪穴住居跡2基と大型竪穴2棟及び小形竪穴1棟がセットをなし、連続する二時期に営まれた官衙的施設と考えられる。上城遺跡からは奈良～平安前期の掘立柱建物の柱穴から海老状礎が出土し、石山遺跡も含め「評」及び「郡衙」の正倉の一部を構成する可能性が強くなり、古代においても当地一帯が都の中心であったことを示す。また、礎以外の出土遺物にも注目されるものが少なくなく、市第I遺跡の銅椀（蓋）と墨書土器、石山遺跡の練刺土器、尾首遺跡の墨書土器（神長又は郷長）、日向塚遺跡の竊骨器、及び各遺跡出土の製塩土器や牛馬歯などが挙げられる。また、土師器を主とする土器には大分平野部との強い関連性が看取され、これらの遺跡が国衙とも密接に繋がる性格を有していたことが考えられる。そして、これらは郡衙のほか奈良時代において当地に設置された「直入駅」や「牧」にも関係する遺物の出土でもあると云えよう。

一方、この地域には二つの興味深い伝説が残る。一つは『豊後国風土記』や『日本書紀』に記されている景行天皇の土蜘蛛討討とこれに伴う行宮の設置である。この行宮の建てられた所が「宮廻野」の地名となり、明治後半から「都野村」が置かれる。もう一つは「宮廻野神社」の社伝である。同神社は明治以前は嵯峨宮と呼ばれ景行天皇・嵯峨天皇・日本武尊を祭神とする。その由緒は弘仁5年（814）直入郡擬大願部阿摩雄の娘が遊ばれて嵯峨天皇の内侍となり、天皇崩御のち当地の隅りとなり恩賜の品を獲山陵と称する所に埋め日夜勤仕し、その兄広国が仁寿3年（853）に神社を造営したことに始まるとされる。これらの伝説は安易に信用できないものではないが、朝廷や豊後国府と繋がりや有する在地勢力の存在は先に述べた古代の遺跡・遺物からも窺い知ることが可能である。

中世において当地域は国衙領の朽網郷となり、その地頭職には朽網泰親の名が『豊後国因幡帳』に見える。この朽網氏が在地の大神氏系か大友初代の養父である中原親能の系譜を引くとされる古占氏系であるのか、それを示す確実な史料はないようである。この朽網氏の系統は永正年間到大友氏に反乱を起こした朽網親満で途切れ、その後は大友一族の人田氏が継ぐが島津氏の豊後侵入の時に内応したことにより大友義統に滅ぼされる。この間の主要遺跡には鎌倉～室町時代の地頭クラスの館とも推定される上城遺跡、戦国期の朽網氏の館跡ではないかとされる小路遺跡、朽網氏の詰城である山野城跡やその支城の三船城跡などがある。

証1. 『久住町誌』1974 久住町

1. 菅川光夫他「コウゾー-松遺跡」1974 久住町教育委員会
2. 菅川光夫・島崎孝好「湯ノ上古墳」1969 久住町教育委員会
3. 高橋信武他「横穴住居跡・前山遺跡」1989 直入町教育委員会
4. 近谷忠喜・高橋信武他「三友田遺跡発掘調査概報」1985 直入町教育委員会
5. 高橋信武他「横穴遺跡・日向塚遺跡」1988 直入町教育委員会
6. 宮内克己・高橋信武他「市第I遺跡・石山遺跡」1996 久住町教育委員会
7. 宮内克己「都野原田遺跡」2001 久住町教育委員会
8. 藤原幸徳「市第IV遺跡・トグウ遺跡・花立遺跡」2000 久住町教育委員会
9. 後藤一重「小路遺跡・上城遺跡」2000 久住町教育委員会
10. 高橋信武他「市第II遺跡・市第III遺跡・仏原第I～III遺跡」1997 久住町教育委員会
11. 高橋信武「尾首遺跡・市第V遺跡」1998 久住町教育委員会
12. その地頭職の折り、天皇は本我神・直入物部神・直入中臣神の在地神に祈りを捧げたと記されており塚原氏の系譜は豊後の重臣部と同時期であったものと思われる。
13. この社伝は江戸時代に編纂された『豊後国志』に引用された「豊日記」によるものであるが、「豊日誌」は現存しない。
14. 比10文庫
15. 宮内克己「山野城跡」1996 久住町教育委員会

第二章 調査

1、調査の概要

本遺跡は入住町大字仏原字南に位置する古墳時代前期の墳墓群である（第3図）。この墳墓群と対をなす集落跡である原田遺跡は北西に続く丘陵部にあり、古墳前期には旧向入部における大規模拠点集落となった遺跡である。原田遺跡より10m余り低い標高557～562m、幅20～30mの細い尾根の先端に前方後方墳（1号墳）が、その北側に前方後円墳（2号墳）が造営され、この2基の古墳の北側にある集落との間を隔てるやや浅い谷部には約50基の集団墓が形成されている。また、古墳の東側には住居跡等の堅穴6基の存在も確認された。両古墳はいずれも水田化の際に墳丘部分を大きく削り取られ、全く原形を保っていないことから試掘調査以前は高塚墳と認識されていたものである。

試掘調査により溝と堅穴の一部が確認され木調査を実施することとなったが、溝が前方後方墳と前方後円墳の周溝でありその周辺に集団墓も存在することが判明したのは表土除去後のことであった。また、備かに残る墳丘部分は工事対象外であったため急速地権者の了解を得て抜開作業を行い測量調査を実施した。調査は原田遺跡の調査と平行し、平成8年9月上旬から開始し同年12月25日に終了した。この間、本遺跡の現状保存の処置が取られることとなったため、堅穴は完掘したが古墳と集団墓の調査は必要最小限に留めた。

調査の結果、1号墳はほぼ東西に主軸をとり一辺約20mの後方部に長さ約5mの前方部をもつことが判明した。前方部の周溝は先端部には設けられず、くびれ部付近から幅や深さが明確となるが南側は削平などのため一部消失する。周溝内に設定した第Ⅰ～Ⅲトレンチからは複合口縁蓋・妻・椀・小形甕などの土器が出土し古墳時代前期前葉に造営されたものと考えられる。墳丘部分のマウンドの残りもやや不良であり中央部には盗掘坑があるが、その周囲に石材等は認められないことから主体部は木棺墓である可能性が高い。

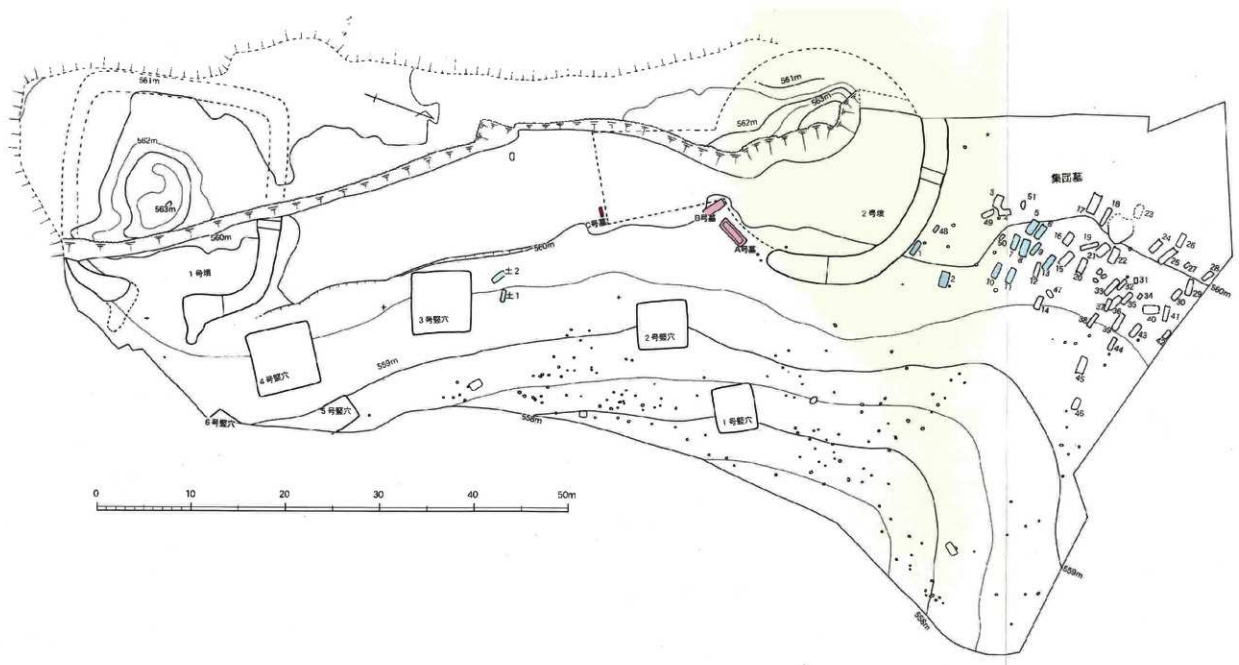
2号墳の周溝は後円部の中段で終息し、溝の延長部分に2基（A・B号）の木棺墓が検出された。2基は主軸をほぼ直交する状況で形成され、B号の南東約10mにはこれらと主軸を異にするC号木棺墓が確認された。これら木棺墓は集団墓の木棺墓と比べより入念な造りであり較差が存在することや墳丘測量図から、A・B号墓は前方後円墳のくびれ部に設けられ、C号墓は前方部先端に設けられたものと判断されたこと等から前方後円墳と考えた。2号墳の造営時期は、周溝出土の土器から1号に後続する古墳前期中葉に属される。

集団墓はほぼ中央に石棺墓1基が設けられるがこの他は大多数の木棺墓と少数の土槨墓から構成されるものと思われる。これらは主軸を東西方向にとり、並行する2基を単位とし数世代にわたると判断されるが内部調査を行った11基からの副葬品はほぼ皆無であった。集落である都野原田遺跡の集団墓も同様の構造・展開を示すがその中の3基からは鉄剣が出土しており、性格の違いが窺われる。また、1・2号墳の東側斜面にあり住居跡と判断される4基の堅穴は2基づつ近接し、このうち2・4号堅穴は両古墳のくびれ部を意識した位置に形成されている。堅穴の構造や遺物に原田遺跡の堅穴との差異は認められないこと等から墓守りの住居跡と推定される。

2、仏原千人塚1号墳の調査

1号墳は調査区南側、北西から南東に延びる尾根の端部（標高560.5～563m）に位置する。主軸をほぼ東西にとり尾根筋とは並行せず交差する形となる。前方部から後方部前面上にかけては水田化により1.1～1.5m余り削平を受け墳丘部分は完全に消失し、標高560～559.5mの所から周溝下半部が検出された。調査区の外に現存する後方部の墳丘も築造時の姿とは大きく異なり、墳丘裾部の周辺の盛土は土取等によって失われわずかに主体部周辺の不整形に低いマウンドを残すのみである。また、中心部は盗掘により摺鉢状に窪み、その南東部から南側にも通路状の浅い窪みが認められ、現状から墳形を判断することは不可能であるが測量図には後方部北側周溝の一部痕跡が浅い窪みとして示されている。

調査区内からは前方部より後方部に続く周溝が検出されたが、前方部の前面に周溝は確認されなかった。これ



第3図 仏原千人塚古墳群遺構配置図 (1/400)



第4図 仏原千人塚1号墳測量図 (1/200)

は削平によるものではなく当初から周溝は設けられていなかったものと考えられる。また、南側くびれ部から前方部に続く周溝は削平により消失したものであるが、周溝そのものが当初から北側に比べ浅い掘込みとなっていた可能性が高い。その原因は南側周溝は尾根の境界に当たることや、古墳へ至る通路は北側の尾根沿いを進み4号竪穴の周を通り前方部に続く一方向に限られていたことによると思われる。

後方部北側の周溝は4号竪穴の内約3mの部分でほぼ直角に屈曲し、約6~7m程でくびれ部に至る。南側は調査区の境界がコーナー部分に当たり、周溝内側で両コーナーの距離は約18mを測るが溝底内側まで含めると、後方部の一辺はおよそ20mに復原される。この規模は南・西側地形の境界にほぼ納まる。北側くびれ部の周溝内側はほぼ直角に曲がるが、外側の掘方は次第にすばまりながら前方部の周溝に続く。くびれ部内側のコーナーから5.2mの部分で前方部周溝は終息するが、内側の掘方ラインはわずかに外に開くことなどから、前方部の長さは5.5m、先端幅約7m、くびれ部幅約4mに復原される。また、墳丘の段築成については現状では不明である。以下、周溝に設定した第Ⅰ~Ⅲトレンチの調査について述べる。

第Ⅰトレンチ (第5図)

後方部南側から東側周溝に設置したトレンチである。周溝は調査区の南西隅付近から検出されたが、調査区西端から約1mの所で緩く屈曲しここが南東コーナーとなり前面(東側)の周溝へと続く。屈曲部分から北側約5mのくびれ部で溝は途切れるが、本来は一段浅くなり前方部の周溝へと連続していたと考えられ、検出時点では若干ながら周溝の痕跡が認められた。

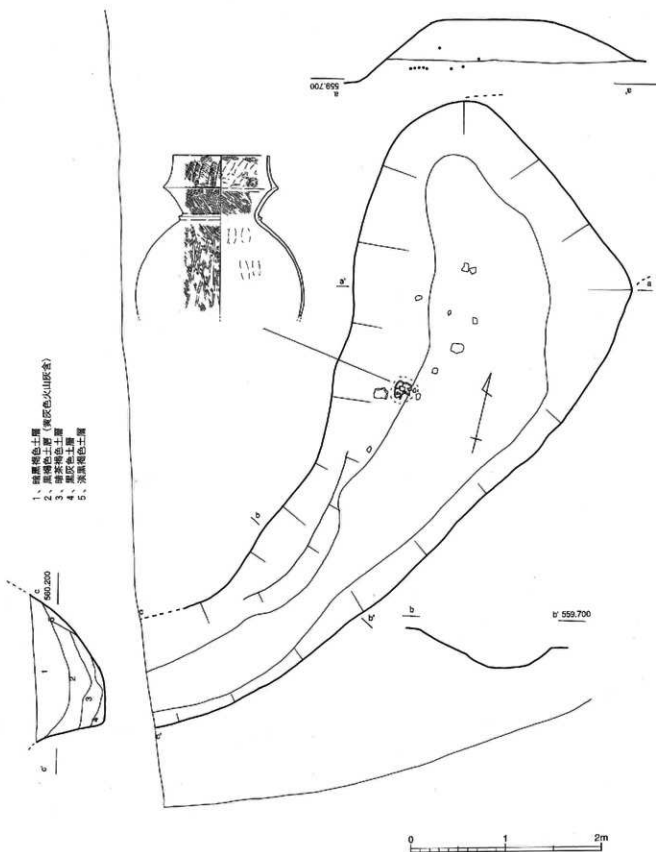
南東コーナー部分で現状の溝幅1.1m、深さ約0.2~0.4mとやや狭小であるが、くびれ部に向かって次第に幅広く溝底のレベルも0.2m余り深くなる。西端部の土層断面観察地点(c-c')では溝の幅1.6m、深さ0.7mを測り築造時の規模を示している。しかし、この周溝の規模は第Ⅱ・Ⅲトレンチで確認された北側周溝に比べ全体的にやや小さく、溝底面のレベルも約0.7~0.9mほど浅いものとなる。周溝の底は平坦をなすが内外の屈曲角度に違いがあり、外側の掘込みやや急であるのに対し内側は緩く立ち上ることは他のトレンチと同様である。周溝内部の土層は5層に分けられるが調査区内では削平のため2層の中心から下の土層の堆積しか認められず、他のトレンチで観察された古墳時代前期の九重火山群噴出の火山灰は検出されなかった。また、第1層の上には旧水田の床土が認められ水田造成に伴う墳丘の削平が2回にわたることを示し、最初の水田化により前方部や後方部の墳丘裾周辺が大きく削り取られたものと思われる。くびれ部周辺の第2層から若干の土器が出したが、他のトレンチに少なく図示可能なものは複合口縁壺の口縁部から胴部片のみであった(第8図1)。

第Ⅱトレンチ (第6図)

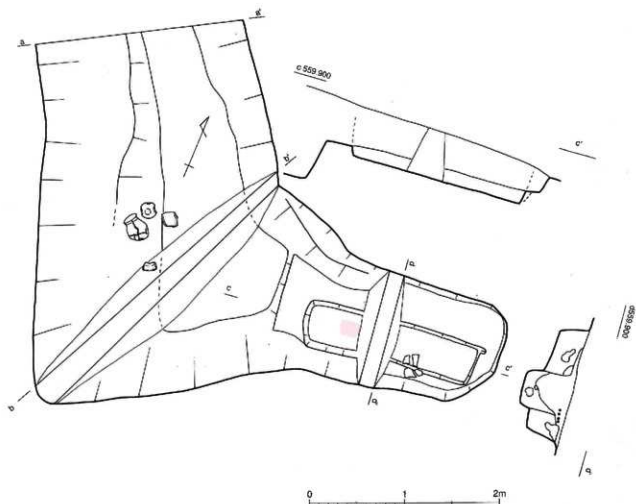
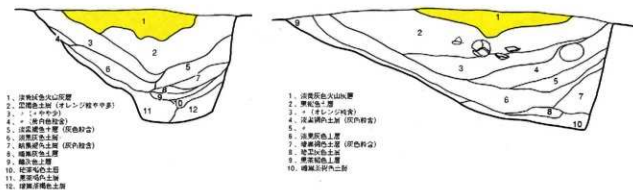
北側のくびれ部から前方部にかけて設定したトレンチである。緩く曲がる東北コーナーから続くくびれ部の周溝の内側ラインは直角に近い角度で屈曲し、これより約5m東側の前方部で終息する。周溝外側ラインは緩やかな弧状をなしながらすばまり、前方部では溝幅は狭くなる。調査区北側部分(a-a')の周溝の上面幅は2.3m、深さ1.2~1.3mを測り、内側は一部二段折りとなり断面は逆台形状を呈する。墳丘に続く周溝内側の立上りは比較的緩やかであるのに対し外側は急角度となる点は第Ⅰトレンチと同様である。溝底はほぼ平面をなすが前方部先端より約2.5mの部分で一段(約0.5m)高くなり前方部の周溝へと続く。前方部の周溝は長さ約2.2~2.5mで全体にやや南側へ屈折する。中程で幅約1.3m、深さ0.2~0.4mを測り先端に行くに従って次第に浅くなる。この部分の溝内には木棺墓が形成されている。

周溝内部の上層(a-a'、b-b')は10層前後に細分されるが、1層の黄灰色火山灰層、2・3層の完形土器等の遺物を含む黒褐色土層、4層以下の遺物をほとんど含まない層の三つに大別できる。1層は古墳時代前期中頃に九重火山群から噴出したと推定される火山灰からなり、当地域の全体に分布し都野原田遺跡など当該期の竪穴覆土に観察されることも少なくない。周溝内部に黄土の転落は認められず、4層から下位の土層は自然堆積と考えられ遺物も非常に少ない。横転した状態で出土した燧など2・3層出土の土器(第8図2~5)は墳丘部に置かれていたものが九重火山の噴火により転落した可能性が高いものと考えられる。

前方部の溝に設けられた木棺墓は周溝の中央ではなく墳丘寄りに位置し、小口や副板の設置痕跡は不明であっ



第5図 仏原千人塚1号墳第Iトレンチ実測図 (1/40)

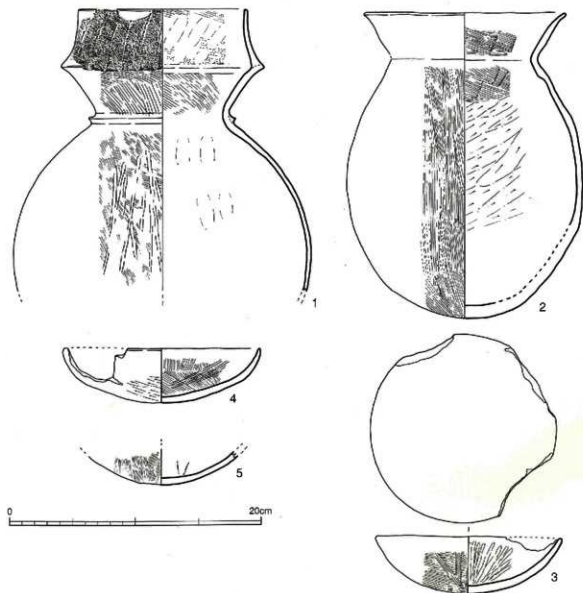


第6図 仏原千人塚1号墳第Ⅱトレンチ実測図 (1/40)

たが北東部の隅が短く突出することから組合せの箱型木棺を主体とするものと考えられた。床面全長1.87m、東側小口幅0.38m、西側小口幅0.36mを測り、土層ベルト西側の床面には赤色顔料（ベンガラか）が薄く蒔かれていた。造葬にあたっては剛溝の床面を約0.2mほど掘り下げ、2～3枚の側板と小口板各1枚を設置し控え部分は埋土する。そして、木棺床面より約0.5mの高さで蓋を置きその上に盛土したことが土層観察から導き出

第9図1～8は第Ⅲトレンチから出土。1は完形の小形長頸壺で底部中央を内側からの敲打により穿孔する。孔は2つ認められるが小形の方は打欠き時点の失敗と思われる。口縁部から頸部は内外ともハケのち縦のミガキをやや丁寧に加え、胴部外面は縦方向のハケのち横ハケを一部施す。白・赤色粒や角閃石を含み、底部周辺にはススが付着する。口径13.4cm、器高15.4cm。2も球形の胴部にやや長い頸部を付す小形長頸壺で底部を打欠き穿孔する。内外面とも横のミガキによる仕上げであるが、胴部外面には縦方向のハケを部分的に残す。口径13.1cm、器高19.4cmを測り、胎土に砂粒をあまり含まない丁寧な造りで搬入品か。3も長頸壺であるが、頸部の中程から上を均一に打欠くもの。外面の調整は2と類似するがミガキはやや雑に施し、胎土も同様。

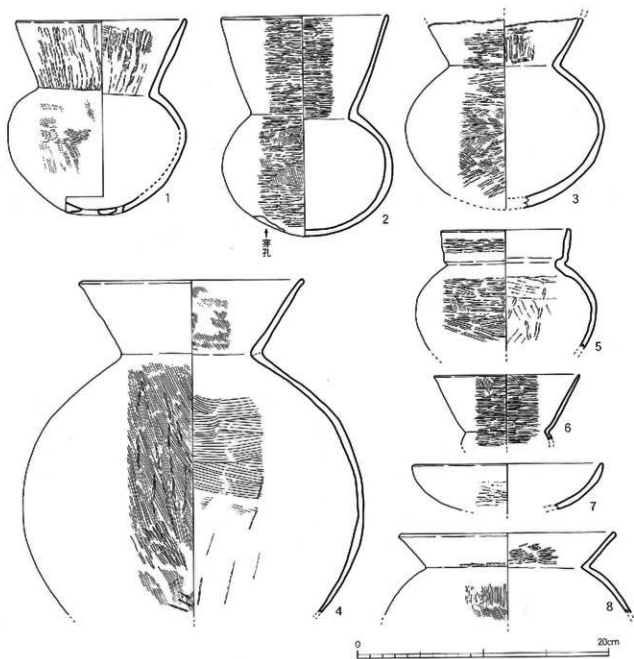
4は大形の無頸壺で、ほぼ球形に張り出す胴部から屈曲し斜上方に直線的にやや長く延びる口縁部に続く。内外ともハケ調整を主とし外面にはミガキを粗く加えるが、下位にタタキの痕跡が認められこれが最初の調整であることを示す。口径17.7cmを測り、薄く丁寧な造りであり搬入品の可能性が高い。5は小形の山陰系二重口縁壺の口縁部から胴部片。ほぼ直立する口縁部から屈曲して短く締まる頸部に続き、胴部は球形に張り出す。外面はミガキを主とするが胴部にハケが部分的に残り、胴部内面はケズリにミガキを粗く加える。口径10.4cmを測り、白・赤色粒や角閃石を含み淡黄灰褐色を呈する搬入品。6は小型丸底壺の精製品で、全面横方向の丁寧なミガキによるが、外面の頸部と胴部の境にわずかにハケが残る。口径11.4cm、胎土に砂粒を殆ど含まず器型も薄



第8図 仏原千人塚1号墳第Ⅰ・Ⅱトレンチ出土土器 (1/3)

い。7は口径15cmを測る柄の口縁部片で外面はやや雑なケズリとミガキによるもの。8はほぼ直線的に外に開く口縁部からやや肩の張る胴部に続く裏で造りは比較的丁寧である。

これらの土器は築造後の供献の可能性も全くないとは言えないが、各土器は出土層位を同じくすることや明らかかな型式差は見られないこと等、時期的にほぼ同一時期と考えて大過ないと思われる。そして、第8図1の複合口縁壺の口縁部が直立しないことや、第9図5の山陰系二重口縁壺及び同図4の無頸帯等の器形・調整などから古墳時代前期前葉の新段階に比定され、仏原千人塚1号墳の時期もここに置かれよう。



第9図 仏原千人塚1号墳第3トレンチ出土土器 (1/3)

3、仏原千人塚2号墳の調査

1号墳の北側約35m、標高561.5～563m余りの尾根上にあり、1号墳とは異なり主軸を南北にとり尾根と並行して築造される。主体部を含む後円部と前方部の大半を土取りのため消失し、西側くびれ部分周辺から後円部の一部が残存するのみである。

墳丘の現状からは前方後円墳とは判断できないが、後円部の周溝やくびれ部と前方部の墳丘裾部に営まれた木棺墓3基の位置から全長は約35mの前方後円墳に復原される。後円部西側の墳丘裾部はやや急な斜面であることから、後円部は正円とはならず西側には周溝も設けられなかった可能性が高い。残存する後円部の断面には墳丘盛土が露出するが版築は観察されなかった。盛土の範囲は標高562.5m付近から上の部分に限られ、これより下位は地山整形によるものと思われる。また、後円部とくびれ部の墳丘表面には部分的に葺石が認められるが、段築の数については不明である。

調査区からは全長約30mの半円状に巡る後円部の周溝が検出された。尾根を切断するように巡らされた周溝の幅は約2～3mを測り、調査区の西側外は崖となることからここで途切れるものと判断される。周溝の円弧から復原される後円部の直径は約22mである。周溝の東側は中央よりやや南側の部分で舌状に終息し、その南西延長上約3mの平坦地にA号木棺墓が、A号の1m南側にはこれと主軸をほぼ直交するB号木棺が形成されていることから、この部分がくびれ部にあると推定した。そして、B号木棺墓の南東約10mの地点には2号墳の主軸と直交する状況でC号木棺墓が設けられていること等から、2号墳を前方後円墳と判断した。この3基の木棺墓は、後述するように集団墓の構造と比べ非常に丁寧な造墓であり階層差を反映していると考えられる。

周溝に設定した2箇所のトレンチからは人頭大から華大の礫が多数検出され、現状の墳丘に残るものも含め2号墳は葺石を伴うことは確実である。削平のため検出面から溝底までは約1mと浅く、断面形は1号墳の周溝とはやや異なりU字又は三角形に近いものとなる。また、くびれ部の東側約10mの所に2号壜穴が、その北東約5mの地点に1号壜穴が営まれている。

以下、第Ⅰ・ⅡトレンチとA～C号木棺墓の概要について述べる。

第Ⅰトレンチ (第10図)

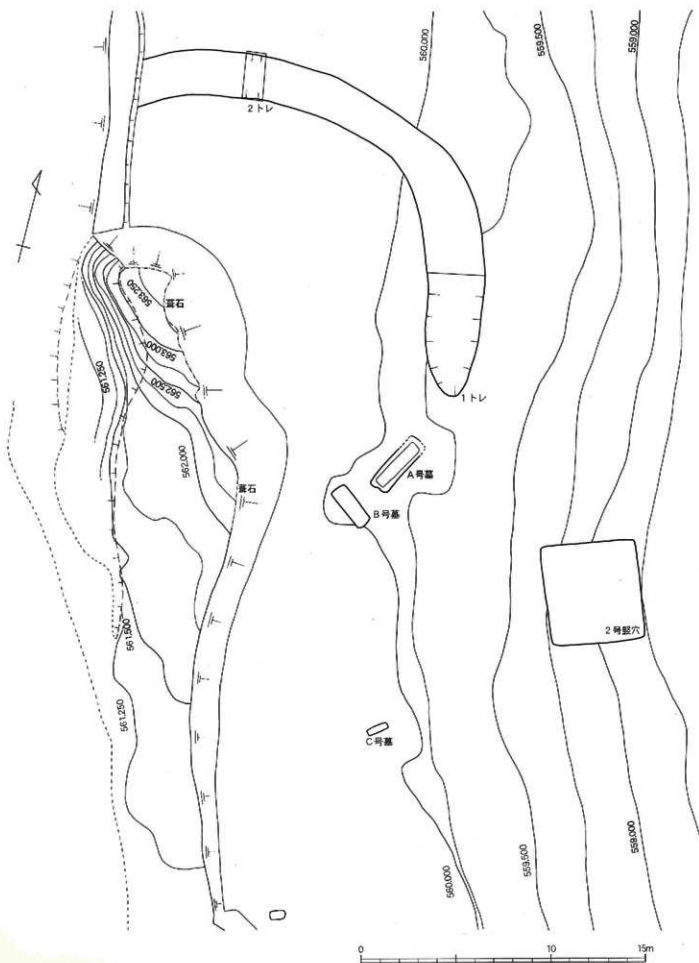
周溝の終息部分に設定したトレンチである。当初1m幅で設定したが葺石が検出されたため溝内部を約6mに拡張し調査した。調査区北側で溝幅2.9m、深さ1mを測り、断面は緩い三角形に近い形状を呈するが南側は次第に浅くなると共に床面もより平坦となり、終息部の床面の検出面からの深さは0.3m程である。

溝の内側斜面には長さ0.1～0.5m余りの河原石を主とした葺石が墳丘から転落した状態で密集して検出された。これらの礫の表面は黄灰色火山灰により覆われており、葺石の転落と火山灰の降下はほぼ同時期と判断されよう。従って、古墳の墳丘部に葺かれていた葺石は九重火山の噴火とこれに伴う地震により一挙に崩落したものと考えられる。第10図に示したトレンチ北側の土層図では、火山灰の降下の後に堆積した1層(淡黒褐色土層)の下に厚さ約0.2mとやや厚い火山灰層があり、葺石はこれと地山の間に挟まれた状態で検出されている。また、4層から12層の各土層は自然堆積ではなく葺石と同時に崩落した古墳の墳丘盛土と考えられ、2号墳の造営時期と九重火山の噴火が近接していたことを窺わせる。この土層の所見は仏原千人塚1号墳の各トレンチでは観察されておらず、両古墳の間に時期差があることを裏付けるものと言えよう。

本トレンチからの土器の出土は少なく完形品は無いが、これは葺石などと同時に転落したため破片化したことが原因と考えられよう。その中で第13図Ⅰに示した土器は、終息部の床面からと葺石周辺部から出土したものが各々接合したものである。

第Ⅱトレンチ (第12図)

周溝の最も北側に幅約1mで設定したトレンチである。周溝の幅2.6m、深さ約1.2mを測り、断面はJ字形に近い形状をなし床面も平坦とはならない。第12図の上層断面図には1層の水田床土の下に2層の黄灰色火山灰



第10図 仏原千人塚2号墳丘測量図 (1/200)



第11図 仏原千人塚2号墳第1トレンチ実測図 (1/40)

が薄く堆積し、その下位は填丘盛土の崩落した土層が示されている。火山灰層の薄さは削平の結果であり、蓋石が見られない点は実際は検出された3層以下の蓋石を調査の都合により除去したことによる。本来の蓋石の検出状況は第1トレンチと同様であった。

3層から10層にはa～cの三種類の火山灰ブロックが混在する。全体で厚さ約1mを測り、一見したところ

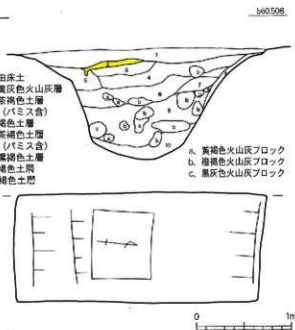
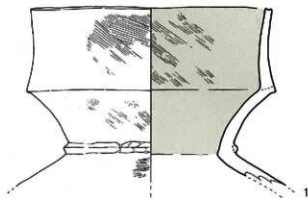
時間経過とも見えるが実際はごく短期間に堆積したものである。また、b・cブロックは縄文時代中期から弥生時代に噴出・堆積したと推定されるものである。以上の調査結果は、本古墳の墳丘盛土に使用された土層が九重火山の噴火と地震により礫石と共に円溝内部に転落したことを示し、これは第1トレンチの所見と同様である。なお、内部から土器等の出土は認められなかった。

第1トレンチ出土土器 (第13図)

1は複合口縁壺の頸部から口縁部片。ほぼ直立する口縁部の上半部分が僅かに反転して外に開き、頸部と胴部の境に三角形突帯を揃まみ上げながら巡らす。胴部はやや大きく張り出すと思われる。内外面ともハケ調整を主とし、胴部に一部ミガキを施す。口径19cmを測り、内面には黒色顔料の塗布が見られる。胎土に砂粒を殆ど含まないことから搬入土器と考えられる。

2は11縁端部と底部を欠く在地系甕、口縁部は反転しながらやや大きく外に開き胴部は卵球形を呈する。外面はやや粗い縦方向のハケ、内面はナデによる調整で煮炊きに使用された痕跡を残す。

複合口縁壺に見られる特徴は1号墳出土の壺に比べ新しく、古墳時代前期中葉に置かれよう。



第12図 仏原千人塚2号墳第Ⅱトレンチ実測図 (1/40)



第13図 仏原千人塚2号墳第Ⅰトレンチ出土土器 (1/30)

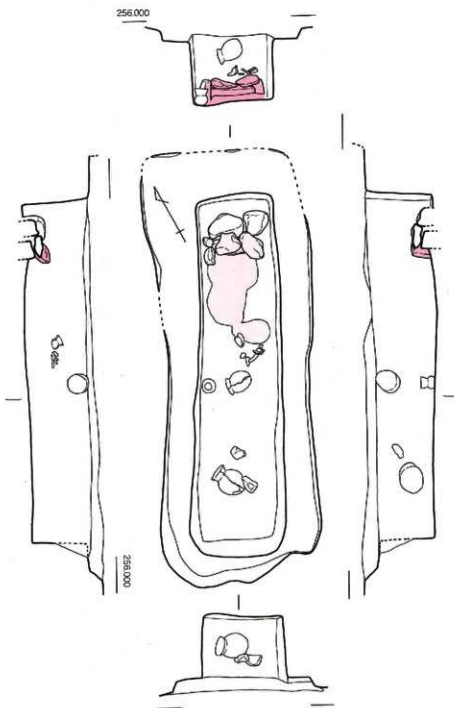
A号墓 (第14図)

2号墳の周溝終点部から南西約3mに位置し、周溝の描く円弧の延長上に造蓋されている。二段組の木棺蓋であり、蓋の平面形は全長3.4m、中央部幅1.1mの長方形を呈するが削平のため部分的に消滅又は変形する。残りの良い部分で深さは約13cmを測り、二段目掘方までの幅は5~30cmであるが両側から北側にかけては蓋板が安定するよう一定の幅を保つが目張り粘上等は確認されず蓋板の数は不明である。二段目上面は全長2.9m、北側小口幅0.6m、南側小口幅0.75mで足元の南側がやや幅広となり、床面までの深さは約0.5m。中央部横断面の土層には両側板の設置痕跡が観察され両側壁の床面ラインが直線をなさず若干の曲折があること等から、木棺

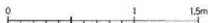
は厚さ3cm前後の板材を用い側板は3枚前後、両小口板は各1枚から構成されていたものと推定される。

北側小口と0.1m余り離れた床面に人頭ほどの河原石7個を用い、高さ約0.2mの二段組の石枕を設置する。一段目は腰石状に埋め込みその上に偏平礫2個を平置する。その西側は袖石状に立てられた2石からなり、背後はやや大形の礫2個により補強した入念な造りである。偏平礫から中央の床面にかけては赤色顔料が塗布されるが、装身具等は検出されなかった。石枕から南側小口までの長さ2.27m、中央部床面幅0.6mを測り、頭位はN-27°-E。被葬者は成人女性かと考えられ、規模は本古墳群や郡野原山遺跡など周辺を含めた木棺墓の中でも最大である。

内部からは棺内副葬の土器1個体、棺外副葬3個体のほぼ完形土器が検出された。第15図3に示した小形短頸



第14図 仏原千人塚2号墳A号墳実測図 (1/30)



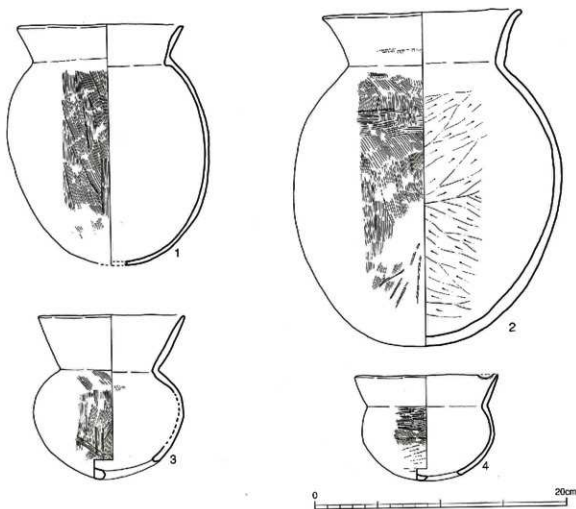
壺は口縁部を上に乗置床面に正置された状態で出土した。底部は打欠きにより穿孔しているが、打欠れた破片の一部は第15図4の小形鉢の破片と共に出土し、整理中に接合したもので上器の棺内副葬と棺外供献に時間差がないことを示す。また、4は7片に打欠かれ、1・2の壺は完形のまま棺外に置かれていたものが蓋板の劣化と棺内への崩落に伴い転落した状態で出土した。

A号墓出土土器 (第15図1~4)

1は口径12.8cm、器高19cmのやや小形の甕。口縁部の開きは弱く、頸部で反転し緩く張り出す胴部から丸底の底部に続く。胴部外面は縦方向のハケ、他はナデによる調整である。2も口縁部の開きと頸部の縮まりがやや弱く、胴部の張り出しはより大きい甕。胴部外面は縦方向のハケに横ハケを一部加え、底部周辺にやや粗なミガキを施す。内面はヘラケズリによる器壁はあまり薄くならず、口径15.4cm、器高26.4cmを測る。

3は底部打欠き穿孔の小形無頸壺、ほぼ球形の胴部に直線的に斜上方に開く口縁部を付す。口径11.6cm、器高7.8cm、4は口縁部の一部と底部を打欠く小形の鉢。底部外面はケズリ、胴部はハケののち横のミガキを施す。口径11.5cm、器高9.7cmを測る。

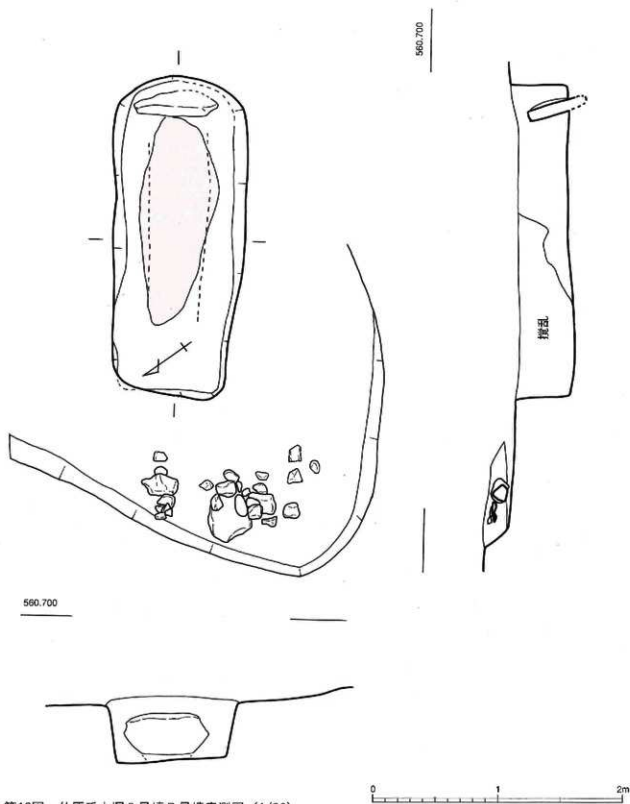
これらの上器は4を除き在地系土からなる。また、2・4の器面には煮炊きの痕跡が残ることから葬送に伴い飲食儀礼が行われたことが想定される。本木棺墓の時期は、以上の土器から古墳時代前期後半に属される。



第15図 仏原千人塚2号墳A号墳出土土器 (1/3)

B号墓 (第16図)

A号の南西約1mにあり木棺を主体とすると考えられるが、全体に削平と共に木棺内部は攪乱を大きく受けている。主体部の西側には段状の浅い掘込みと大小の20点余りの礫が認められ、これは墓端(方形か)の掘方と蓋の設置に伴う礫の可能性もある。



第16図 仏原千人塚2号墳B号墳実測図(1/30)

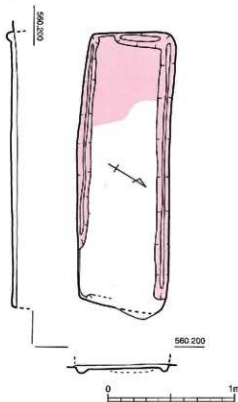
検出面の全長2.55m、東側小口幅1.05m、西側小口幅0.85mを測り、東側の小口は緩いカーブを描く。検出前から床面までは0.4mとやや浅く、中央部から西側はほぼ床面まで攪乱を受ける。東側小口部分には床面から高さ0.3m、幅0.65m、厚さ0.1m前後の板石を設置する。西側小口板の痕跡は攪乱のため不明であるが、両側板の設置痕跡は赤色顔料と共に床面に僅かに残る。従って、頭位と思われる東側小口のみを板石を用いた他は割板を組み合せた木棺墓と考えられる。東側小口石から割板痕跡端部までの全長は1.7mを測るが、西側小口の位置は不明であるため本来の規模は明らかではない。東側小口の幅が西側小口より約0.1m広く、板石を立てることから東頭位と考えられ、方位は $N-56^{\circ}-W$ 。この角度はA号木棺と 83° 異なりほぼ直交するが、この方位自体は前方後円墳と考えられる2号墳の前方部の開く角度に規制された結果と見られる。また、B号墓の規模はA号墓に次ぐ大きさであり、被葬者は成人女性と推定される。

内部から副葬品や土器は全く検出されず、造墓時期の決定は困難であるがA号墓と同時期または近接する時期の所産と考えられる。また、これまで木蓋土壇墓として報告されているものの中には本例と類似するものも少なくない。割板・小口痕跡の検出には注意を要する。

C号墓 (第17図)

B号墓の南東約10.5mに位置する小形の木棺墓である。全体に大きく削平を受け残存するのは床面の一部と浅く窪む割板と小口の掘方に過ぎない。東側小口の掘方もほとんど失われているが、南端部分が僅かに残ることから床面全長1.01mに復原され幅は0.25~0.27mを測る。掘方の幅は検出面で5cm前後で両側板の掘方床面に曲折は無く、割板・小口板とも各々1枚から組合わされた小児木棺墓と想定されよう。また、その特殊な造りと単独で存在することや2号墳の主軸方向とほぼ直交すること等から、本木棺墓は2号墳の前方部先端付近に形成されたものと考えた。

西側床面と割板と小口の掘方内部には赤色顔料が付着しており、頭位部分と木棺を構成する板材の全面に顔料が塗る特別な造りを示す。これに伴う副葬品等の遺物は皆無であったが、棺材全体に赤色顔料を塗る小児墓は集団墓など他に類例はないことから、被葬者はA・B号墓と同じく一般とは異なり2号墳の被葬者との強い繋がりと考えられよう。また、西側を頭位とした場合、方位は $N-61^{\circ}-E$ となる。

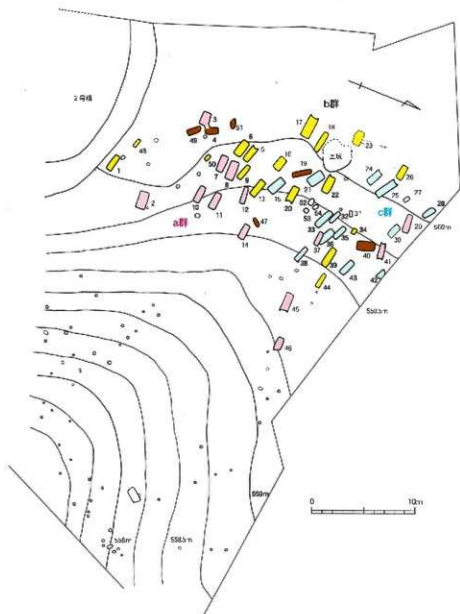


第17図 仏原千人塚2号墳C号墓実測図 (1/30)

4、集団墓・土墳墓

2号墳の周溝北側の浅い谷部に約50基からなる集団墓（第18図）が形成されている。集団墓を区画する遺構は確認されなかったが、縁辺部の5基を除き標高559.5～560mの緩斜面上に南北約25m・東西約15mの帯状に纏まって分布し方位もほぼ一定することから、墓域としての確立はなされていたものと考えられる。集団墓そのものは本古墳群と密接に関連した大規模集落跡や中核的集落跡である小城原遺跡においても検出されているが、集落跡と高塚墳ではその意味・性格に違いがあることは言うまでもない。その9割り以上は全長0.5～2m、幅0.4～1mの長方形を足する木棺墓と判断され、石棺墓1基の他は小児嬰孩墓の可能性をもつものが4基の構成である。木棺墓の規模は都野原田遺跡と比べ全体にやや小ぶりであると言える。また、全長1.4m以上を成人墓としこれ以下を小児墓とした場合、成人墓の数は42基（84%）となり都野原田遺跡の集団墓における成人墓の比率（70%）よりやや高い。

これらは主軸方位を東西方向にとるが、第18図に示すようにほぼ真東西となるa群14基、これより10～15°ほど東に振るb群17基、20°前後東に振るc群14基、その他5基の4グループに分けられる。その他としたものは明確な群をなさないことからa～c群のいずれかに属すると考えられる。この3群はa・b→cと南から北側に順次形成されたと思われることも可能であるが、3つの群は出自集団の違いを示しほぼ同時に営まれたと考えることも可能である。これらの墓は近接・並行する2基を基本単位とし、その周辺にこれらに後続する墓が形成されていることは共通して認められる。従って、時期差と見る場合と集団差と考える場合では追慕活動の時間幅に若干の差が生じるが、いずれの場合でもその始まりは1号墳に先行することなく、終焉も古墳時代前期の中に収まると考えられる。また、各群が血縁に基づくものかこれとは無縁であるか等の詳細については、内部調査を行った11基から人骨や副葬品の出土は皆無であり不明である。一方、都野原田遺跡や小城原遺跡など集落に伴う集団墓・墳墓（成人墓）からは鉄剣が



第18図 仏原千人塚古墳群集団墓分布図（1/300）

検出されており、人骨の出土は無いものの被葬者は男性と推定される例が少なくない。そして、2号墳に付属するA～C号木棺墓の被葬者も女性の可能性があることや、各墓の規模がやや小さいことなどから本集団墓には当地域全体の各集落から選ばれた女性、とりわけ母娘又は姉妹等の血縁や血族を同じくする女性が葬られたと考えられることも可能である。

以下、内部調査を実施した各墓について述べるが、木棺はその構造からⅠ類（小口が側板を挟むもの）、Ⅱ類（側板が小口を挟むもの）、Ⅲ類（小口と側板がほぼ直角に設置されるもの）の3類に大きく分けられる。

1号墓（第19図）

集団墓の南端、2号墳の周溝の北側0.5mに位置する。検出面は全長1.68m、東側幅0.65m、西側幅0.59mの隅丸長方形をなし、床面までの深さは約0.13mと削平をやや大きく受ける。両小口の掘込みは0.1～0.2mとしっかりしているが、南側側板の掘込みは0.05mと浅く、西側の側板の設置痕跡は浅く窪む程度で明確な掘込みは見られない。床面長は1.36m、東側床面幅0.35m、西側推定床面幅約0.3mを測る。東側床面には小口と接し赤色顔料の散布が認められ頭位を示すが、副葬品等は皆無であった。頭位はN-100°-E（b群）。また、南側側板の掘込みには二か所の屈折点が認められ、南側側板は3枚から構成されていたと考えられるⅡ類木棺墓。

本木棺墓は、床面全長がやや短いものの成人墓と推定されよう。

2号墓（同）

1号墓の北東約3.5mに形成された木棺墓である。削平は少なく遺存状況は比較的良好であり、検出面の全長は1.75m、東側幅0.9m、西側幅0.8mの長方形に近いプランをなす。床面までは0.38mを測るが、約0.25mの所で裏込と蓋板設置の段がつき、側板の立ち上がり痕跡が確認された。東側は両側板が小口板を挟むが西側は両者がほぼ直交する構造であり、Ⅰ類とⅡ類の折衷形と思われる。西側小口幅は0.53mで東側より約0.1m広く、小口の掘り方も大きいことから西頭位（N-88°-E）のa群と考えられる。両側の床面ラインの屈折から両側板3枚、小口板各1枚と数枚の蓋板から構成される組合せ木棺墓に復原されよう。床面の全長は1.4mを測り、被葬者は成人と推定されるが副葬品等は全く検出されていない。

5号墓（同）

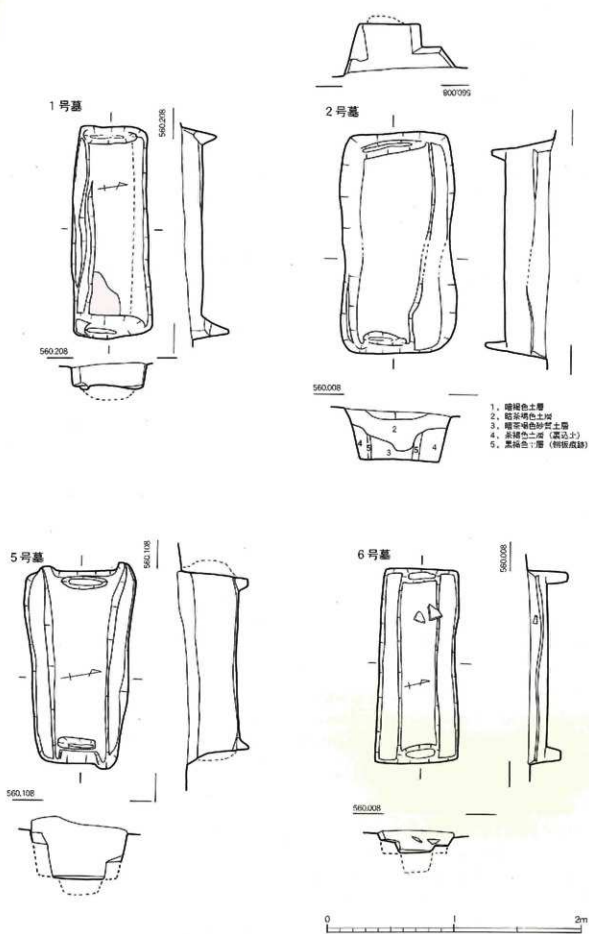
1号の北西約12mにあり6号墓と対をなす。全長1.54m、西側幅0.87m、東側幅0.6mを測り、側板に伴う短い突出部が3箇所認められる。検出面から床面までは0.5～0.42mとやや深い。床面より約0.15～0.3mの所で両側に段が設けられ、この内部に木棺が設置されたことを示す。床面には両小口の掘込みが認められ、西側小口幅は約0.5mで東側より約0.1m余り広くなる。側板の掘り方は床面にはないが両小口の壁には明瞭な掘込みが確認され、側板が小口板を挟むⅡ類木棺である。小口は各1枚で両側板は3～4枚と推定され、床面の全長は1.18mとやや小さいが成人墓と推定される。

西側頭位と考えられ、方位はN-102°-Eでありb群に含まれる。副葬品等は皆無であった。

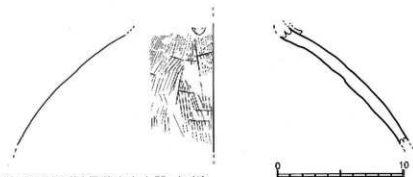
6号墓（同）

5号の南側約0.3mに並行して形成された木棺墓である。検出面の全長1.55m、東側幅0.65m、西側幅0.6mの長方形をなし、床面までの深さは約0.15mと浅い残りである。検出面から約0.05mで両側に一定幅の平坦な段が設けられ、その内部にⅠ類木棺が設置されていたと考えられる。両小口の掘込み幅は約0.3mを測り、深さは西側がやや深い。床面全長1.3m、幅は0.27mでほぼ一定することから頭位は特定し難いが方位はN-103°-Eであり、5号とはほぼ変わらない。側板の掘込みは確認されなかったが枚数は3枚前後と考えられ、全体に小規模ではあるものの成人墓と推定されよう。

西側小口寄りに第20図に示した蓋の胴部片が検出された。小片のため断定は出来ないが棺外副葬の可能性が



第19圖 仏原千人塚集團墓(1・2・5・6号)実測圖(1/30)



第20図 仏原千人塚集団墓6号墓出土土器 (1/3)

あり弥生終末から古墳前期前葉に置かれよう。

7号墓 (第21図)

5号の東側にあり8号と対をなす。全長1.48m、幅約0.7mの長方形を見し、四隅が長軸方向に短く突出する。検出面から床面までは約0.2mと残りは浅く、南側は一部二段掘りとなるが蓋板設置の段ではないようである。床面の全長1.28m、西側小口幅は約0.6mであるが西側小口の掘方はやや狭くなる。中央より東側に赤色顔料が分布するが、これを除く床面の大半は掘り過ぎにより失ってしまった。従って、その分布に片寄りがあるか否かについては不明であり、頭位も東西のいずれかははっきりしないが主軸方位はa群の $N-93^{\circ}-E$ 。両側板の突出からその構造はI類であり、側板3~4枚からなる成人墓と思われる。

8号墓 (同)

7号の北側に並行して営まれた木槨墓で、全長1.87m、東側幅0.8m、西側幅0.9mの隅丸長方形プランをなす。検出面より床面までは約0.25mで浅い残りとなり、床面から0.05~0.1mの所で西側に平坦な段が形成される二段掘りである。西側小口の掘方幅約0.5mと東側より約0.15m大きく、床面の幅も中央より東側が狭くなるI類木槨。中央やや東側に赤色顔料の散布が認められるが、小口の掘方が深い西側を頭位とするものと想定され、 $N-87^{\circ}-E$ のa群。床面の全長1.65mの成人墓と見なされるが、副葬品等は全く検出されなかった。

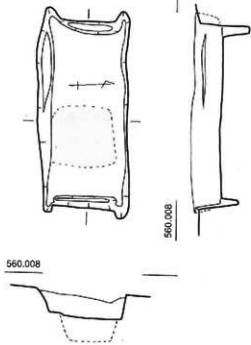
9号墓 (同)

8号の北側に隣接するが方位は5・6号と同じb群に属し、両者に後続すると考えられる。全長1.62m、東側幅0.53m、西側幅0.72mの長方形をなし、検出面から床面までは約0.18m。木槨は西側小口が側板を挟むI類であり、西側小口幅が0.4mと東側より約0.1m広い。床面から約0.1mの高さで西側に平坦な段が設けられ、北側は部分的に小口にも運ることから蓋板はこの高さで設置されていたと考えられる。西側の床面ラインはほぼ直線となるが、側板は3~4枚からなるものと推定される。床面全長は1.28mで成人が西側頭位で葬られたと思われる、方位は $N-98^{\circ}-E$ 。

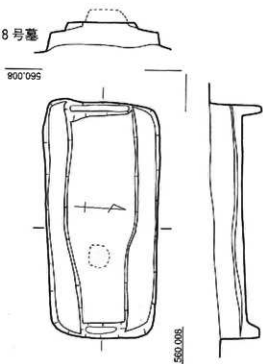
10号墓 (同)

7号の東側約2mにあり、11号と対をなす。検出面の全長1.73m、中央部幅約0.8mの隅丸長方形プランを呈し、約0.1mほど下位の西側に平坦面が形成される。この段から床面までは0.2~0.15mを掘り、西側から東側へ傾斜する。また、西側小口幅は約0.5m、東側小口幅0.37mと西側が広いことから西頭位の可能性がある。床面の全長は1.36mであるが被葬者は成人と推定され、方位はa群の $N-93^{\circ}-E$ 。木槨はI類であり、側板の枚数も9号墓と同様か。

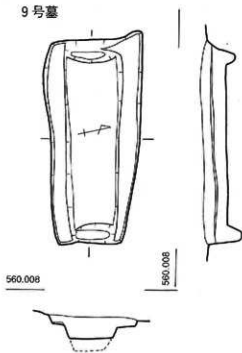
7号墓



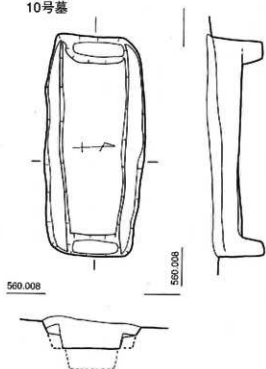
8号墓



9号墓



10号墓



第21图 仏原千人塚集团墓7~10号墓实测图 (1/30)

11号墓 (第23図)

10号の北側約1mにあり、これと並行して形成された1顆木棺墓。全長1.77m、東側幅0.73m、西側幅0.62mの長方形をなし、検出面より約0.1m下の両側に平坦な段が設けられる。この段から床面までは0.1~0.13mと浅く、床面は東から西側に僅かに傾斜する。東側小口の床面幅0.46mで西側よりやや広くなり、床面全長は1.5mの成人墓と考えられる。側板は3~4枚から構成され、方位はN-92°-Eで10号とほぼ同じ。

13号墓 (同)

9号の北側約1.5mに位置する本集團墓唯一の石棺墓である。既に大きく損傷を受け蓋石や側石の一部は除去されていた。墓壙は長さ1.78m、幅0.95mの隅丸長方形をなし、検出面から床面までは0.35m。安山岩の板石を用いた石棺材は両小口に各1枚、側板各々5枚からなるが西側の側板5枚は抜き取られ掘方のみが検出された。西側小口板も破壊により部分的に残るが、幅は0.45mと東側より約0.15m広く頭位と考えられる。残存石棺材は長さ0.2~0.5mと全体に小さいことも特徴と言えよう。擾乱は床面にまで及ぶこともあり副葬品等の遺物や顔料の散布も確認されなかった。床面の全長1.37mの成人墓と推定され、主軸方位はN-101°-Eのb群。

48号墓 (同)

1号の西側約1.7mに形成された小児土墳墓である。全体に削平を受け検出面から床面までは約0.05mと非常に浅い。長さ1.12m、幅0.45mの隅丸長方形に近いプランを呈し、床面に小口や側板の掘込みはない。床面はほぼ平山を呈し、幅は東西とも変わらず頭位は不明であるが、主軸方位はN-100°-Eのb類。

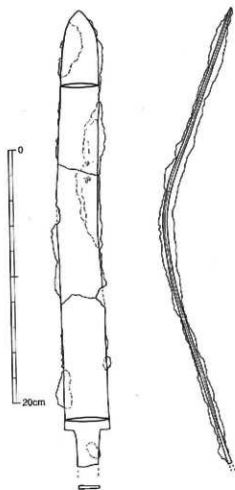
土墳墓 (同)

3号竪穴の北西部2~3mに2墓の土壌が確認された。集団墓とは方位を異にし、住居に隠れるように形成された状況を示すことが掘方が浅く墓壙としては透りが不十分であることから、その住人(墓守り)の墓である可能性が強いものとする。

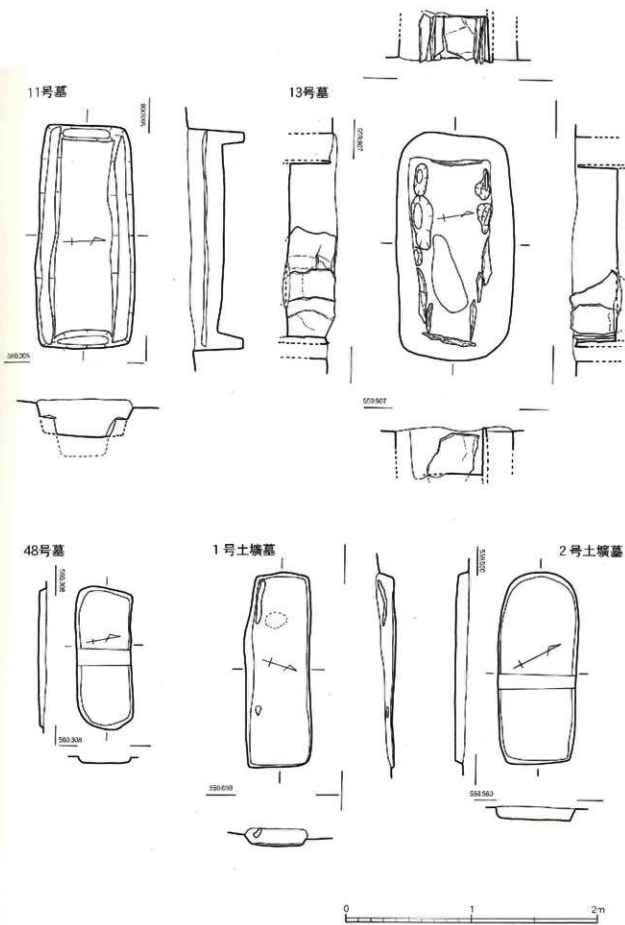
1号土墳墓 全長1.54m、東側幅0.5m、西側幅0.42mの長方形をなし、検出面から床面までは0.05~0.15mと全体に削平を受ける。床面の長さ1.48m、東側幅0.45m、西側幅0.38mを測り、西側がやや狭い。西南隅部の床面よりやや浮いた位置から鉄剣11が切先を東に向け検出され、その北側床面には赤色顔料が楕円状に撒かれていたことから、西頭位を示すと考えられ主軸方位はN-72°-E。被葬者は成人男性と考えられるが木棺墓との格差は言うまでもない。

鉄剣(第22図)は茎尻を欠損するほかはほぼ完全に残り、剣身に布痕跡が付着する。全長36.5cm、剣身中央部幅3.3cm、根部幅3.6cmを測り、根部が最も幅広い。剣身中央の屈曲は遺構検出時に曲がったものである。

2号土墳墓 1号の東側約1mに隣接する。方位はN-118°-Eと異なり、3号竪穴とほぼ並行する。全長1.53m、中央部幅0.63mの長方形に近いプランをなすが、西側短辺は弧状を呈する。検出面から床面までは約0.1mと削平を受け、床面長は1.44m、中央部幅0.56mを測り西側の幅がやや広くなる。



第22図 仏原千人塚1号土墳墓出土鉄剣実測図(1/3)



第23图 仏原千人塚集团墓11・13・48号墓、1・2号土坑墓实测图 (1/30)

5. 竪穴

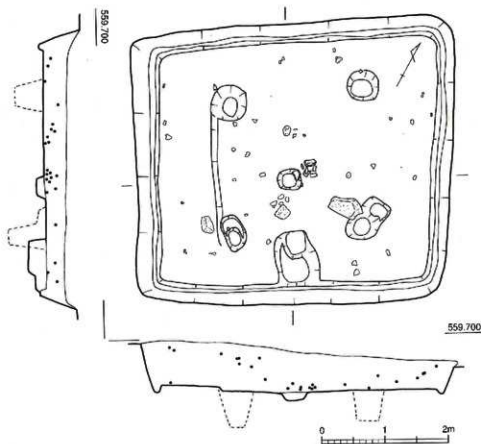
1号墳の東～北側に4基、2号墳の東側に2基の計6基の竪穴が検出された。各竪穴は古墳東側のやや下った緩斜面に形成されているが、住居跡と考えられる1～4号竪穴は両古墳のくびれ部から前方部を意識した位置にあり、古墳の築造後に営まれたと考えられよう。2号墳の東側に位置する1・2号竪穴の主軸は同一方向を向き、1号墳に近い3・4号竪穴の主軸はやや異なるがほぼ同じ等高線上に形成されている。1号墳と4号竪穴の距離は約2.5mと最も接近し、2号墳と2号竪穴の間隔は約9mでありこの間に古墳に至る築造が存在したもののか。

1号竪穴 (第24図)

2号墳の後円部東側約15mの斜面に形成された住居跡である。長辺4.8～5.1m、短辺4～4.2mの東西に長い長方形プランをなし、検出面から床面までは0.3～0.7mと比較的残りは良い。壁溝が全周し南側中央に壁面と接する二段掘りの土坑が設けられる。4本主柱穴の西側2本と壁溝と間にやや低いベッド状遺構が検出され、中央やや南に直径0.4mの不整円形の炉跡が認められる。各主柱穴には柱の抜き取り痕跡が認められ、深さはほぼ一定するが平面形や断面形はそれぞれ異なる。主軸方位はN-58°-E、床面積は16.5m²の小形の竪穴である。内部からは壺・甕・高坏等の土器片と石器や鉄器が検出されたが、竪穴廃絶時の祭祀に伴う可能性をもつものは第25図3に示した壺とほぼ床面から出土した鉄線3点で、他の多くは埋戻しに伴うものと考えられよう。

第25図1は在地系甕の胴部片でやや長胴で張り目の弱いもの。外面は縦方向のハケ、内面はケズリのちみガキを加える。2は外来系甕の胴部片で搬入品と考えられ、外面は縦方向ハケに横ハケを加え内面はケズリのまま。3は炉跡に近接しほぼ床面から出土した複合口縁壺の胴部から口縁部、口縁部は若干内傾しながらやや長く伸びる。胴部の張り出しはやや弱く頸部との境につまみ上げの三角形突帯を巡らす。4は口縁部の立ち上がり短い複合口縁壺で、5はやや肩の張る壺の胴部片。6～8は在来系統の高坏の坏部片で8の外面には顔料を塗る。

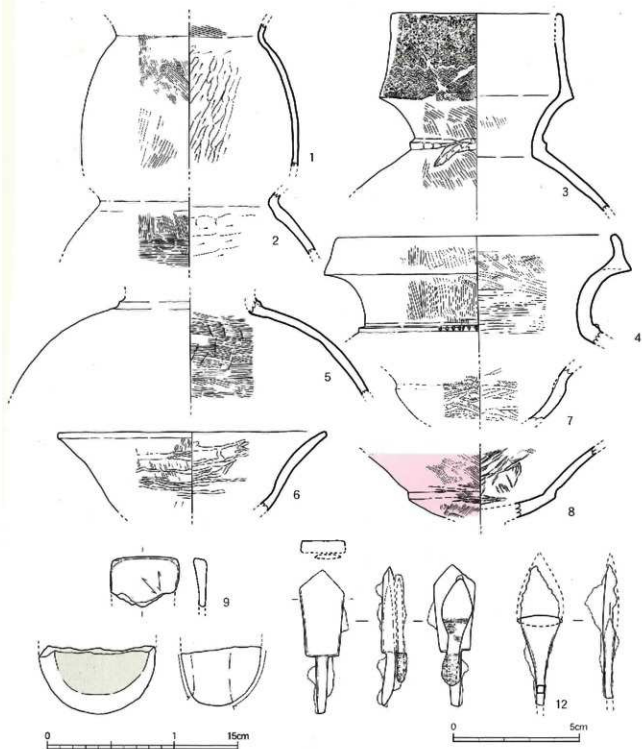
9は小形の砂岩製砥石片で使用により研ぎ減り、重量21.4g。10は安山岩製の磨石。11は中央北側の床面か



第24図 仏原千人塚古墳群1号竪穴実測図 (1/60)

ら検出された定角式と主頭式鉄鍔。定角式鍔は銅鍔を模倣したものと思われる全長5.6cm、茎部長2.2cm、身最大幅1.8cm。主頭式は全長4.2cm、身最大幅1.2cmを測り、茎部に木質が残る。両者は密着しており、重合わせの状態で見られたものか。12も主頭式であるが身の周縁部と茎尻を欠き、現存長5.5cm。

本堅穴は3の臺などから古墳時代前期中葉に属せよう。

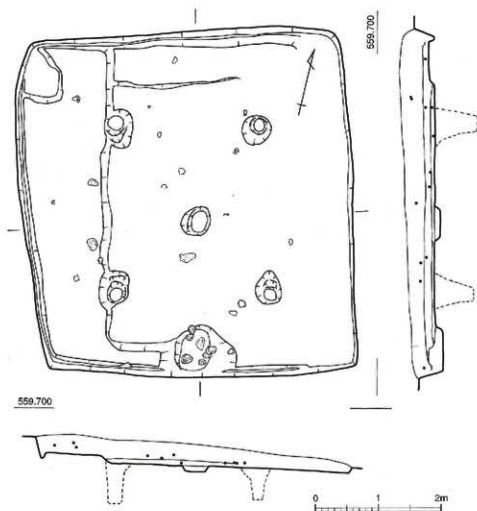


第25図 仏原千人塚1号堅穴出土遺物実測図 (1~10は1/3、11・12は2/3)

2号竪穴 (第26図)

1号竪穴の南西約5m、2号墳のくびれ部東側約10mに位置する南北に長い住居跡である。長辺約5.3m、短辺4.8mの長方形を呈し、床面までの深さは0.1~0.3m余り。壁溝は東側の両隅から東壁を除く三方に設けられ、西側主柱穴から壁に沿って幅1m前後のベッド状遺構が形成される。北側にも段が認められるが不明確なものとなる。南壁中央に接し長軸約1m、短軸0.7mほどの楕円状土坑が配置され、北内隅部の不定形土坑は深さ0.1mと浅いことなどから内部施設ではない可能性が高い。中央部にやや浅いか跡の掘込みがあり、床面積は25.5m²と中規模の竪穴である。4本の主柱穴には柱の抜き取り跡が認められ、主軸方位はN 75°-E。主柱の抜き取りは竪穴の中心側から行われ、各柱穴の断面には2~3回の屈折面が観察される。また、柱穴床面の大きさなどから各主柱の直径は約0.1~0.15mと推定される。この主柱の太さは都野原田遺跡などの一般的な住居跡においても同様であるが、付属施設と思われる小形の竪穴や床面積が80m²以上の特大規模の竪穴の主柱の太さには当然のことながら違いがある。出土遺物はやや少なく、土器も小片が殆どであり祭祀に伴う祭礼を明確に示すものは検出されなかった。

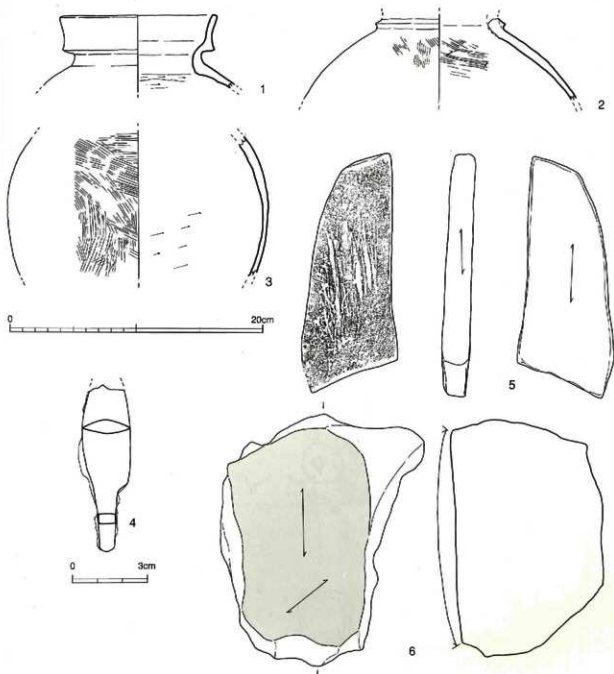
第27図1は山陰系二重口縁蓋のII縁部周辺、外反気味に開く口縁部から屈曲して短く閉まる頸部に続き、ほぼ球形に張り出すと思われる胴部に至る。外面はナデを主とし、胴部内面はヘラケズリによる調整。2は在来系複合II縁蓋の肩部で頸部との境に三角形突帯を巡らし、器面はハケによる。3はほぼ球形に張る甕の胴部片、外面は縦方向のハケののち横ハケを部分的に加え、内面はヘラケズリとナデによる調整。



第26図 仏原千人塚古墳群2号竪穴実測図 (1/60)

4は土頭式鉄鏝であるが、身先端付近を欠く。現長6.4cm、身部幅1.9cmを測り、炉跡の東側から出土。5は砂岩製の砥石で二面を使用するが、左側主面には不規則な削り痕跡が認められる。この痕跡に合致する鉄器としては鉋が考えられる。6は平坦な七面を利用した安山岩製台石。

出土土器が少なく本竪穴の時期を決定するにはやや躊躇するが、1号竪穴に後続するものと考えられる。



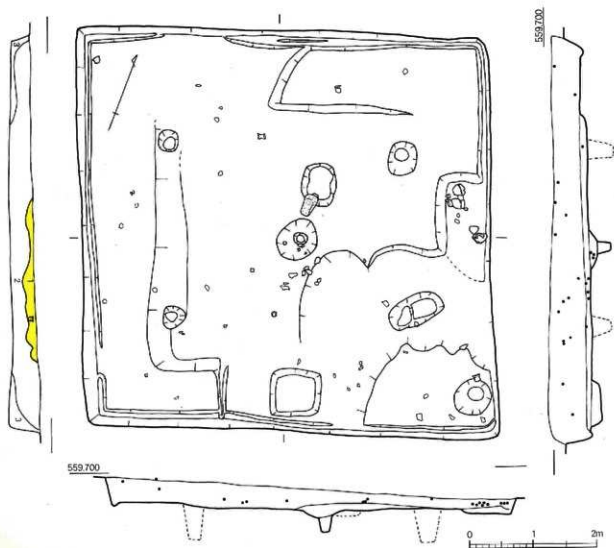
第27図 仏原千人塚2号竪穴出土遺物実測図（4は2/3、ほか1/3）

3号竪穴 (第28図)

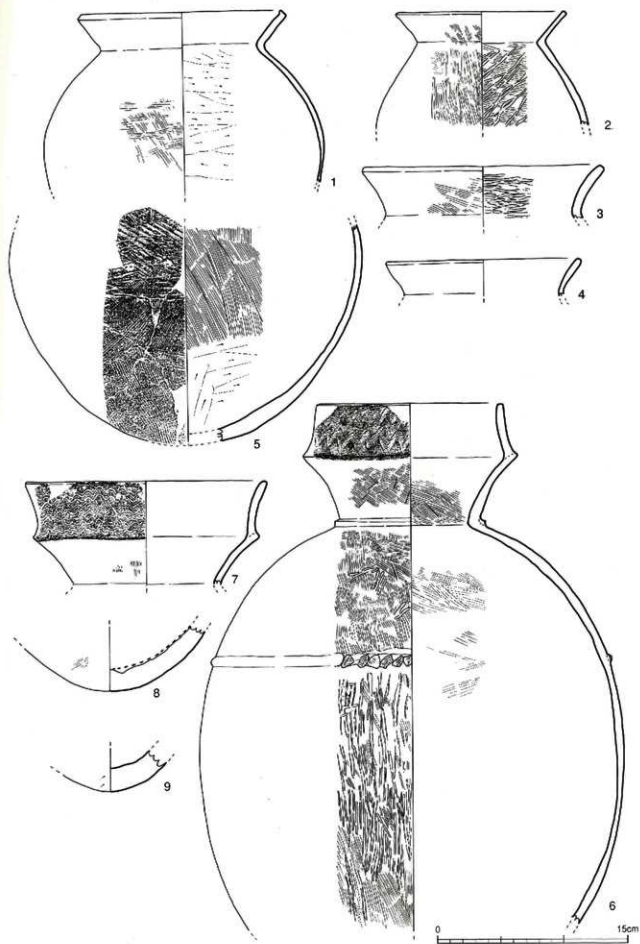
1・2号墳のほぼ中間の東側斜面に位置する。長辺約6.6m、短辺約6.4mの方形に近い長方形を呈し、検出面から床面までは0.4~0.1mで東半部分は削平のため浅くなる。内部の上層は3層からなる。1層は黄灰色火山灰層で竪穴埋戻しの後に堆積したもので殆ど遺物を含まないが、第30図2の小型丸底甕は直立した状態で見出されその内部にも火山灰が詰まっていたことから、竪穴埋戻し終了後の祭祀に用いられたと考えられるものである。

2・3層は埋戻しによる黒褐色~暗黒褐色土層であり土器等の遺物を包含する。壁溝は北・西側などで一部途切れ、東・南壁側床面の中央に土坑が設けられる。東側土坑は壁面に接して形成され、現存長1.2m、幅0.8m、深さ約0.1mを測り、本来は長方形に近いプランと思われるが南側は調査ミスにより消失した。その上面から第29図6に示した大形の複合口縁甕が二か所に大きく分割された状況で出土した。この土器は竪穴の埋戻しの前に行われた祭祀に使用され、最後に分割され内部に置かれたと考えられるものである。南側土坑は0.8×0.7m余りの方形に近い平面形をなし、深さは約0.1mとやや浅く内部や上面からの遺物は見られなかった。また、南東隅部には直径約0.6m、深さ0.4m程の円形土坑があり、西側と北側の一部にはベッド状造構が設けられるがやや低く明確なプランをなさない。

中心部に直径約0.7mの不整円形の炉に伴う掘込みがあり、内部にはやや深い柱穴状のピットが認められる。ピットは竪穴廃絶時に設けられた可能性をもつが、その意味・機能については明かにし難い。炉跡の北側にある楕円状の掘込みも0.1m前後と浅いもので性格についても不明である。主柱穴は4本で東側2本は抜き取りによ



第28図 仏原千人塚古墳群3号竪穴実測図 (1/60)



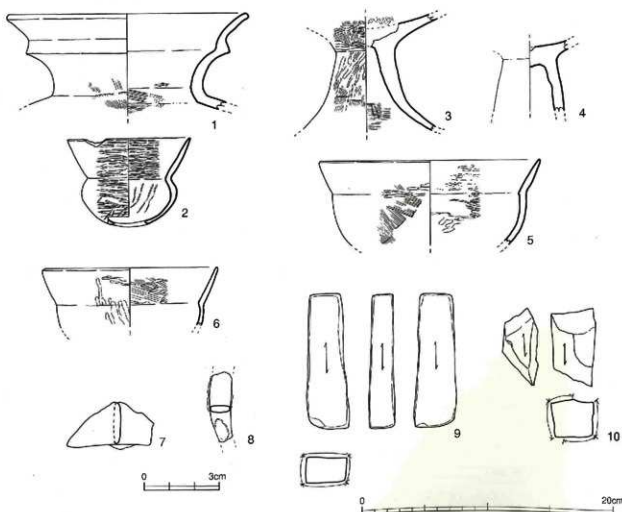
第29図 仏原千人塚3号竖穴出土遺物実測図1 (1/3)

る変形が明らかであり、主軸方位はN-73°-E。床面積は36.58m²と4号整穴に次ぐ規模の住居跡であり、前述の土器他に鉄器・石器なども検出されているがいずれも2・3層からの出土で出土状態に変化はない。

第29図1は布留式系索、直線的に開く口縁部の溝部内側が僅かに肥厚し胴部は球形に張る。胴部外面は縦方向のハケのち横ハケを部分的に加え、内面は横方向のヘラケズリによる調整。胎土に角閃石や白・茶色粒を含む。2は内外面ともハケ調整を主とし、内面にミガキをやや粗く加える在地系変で胴部の張り出しは弱い。3・4も在地系変の口縁部で外反しながら開く。5は胴下半部で球形の胴部から丸底の底部に続き、外面はタタキのちハケで内面はハケのち底部付近にヘラケズリを施す在地系変の胴部片と考えられる。6は束側土坑から出土した大形の複合口縁帯で底部周辺を欠く。卵球形の胴部から屈曲して開く頸部に続き、口縁部はやや反転しながら内傾する。口縁部外面には二段の櫛歯波状文をやや雑に施し頸部に三角形突帯を、胴部最大径よりやや上にベルト状の刻目突帯を施す。内外面ともハケを主とするが胴部外面にはミガキを加え、胎土は在地系。7は反転して外に開く口縁部をもつ複合口縁帯で、8・9は丸底をなす帯の底部片。

第30図1は畿内系二重口縁壺の口縁から頸部片であるが、胎土は灰色粒や角閃石などを含む在地系。2はほぼ完形の小型丸底壺で口縁の一部と底部を打欠く。器面は横方向のミガキにより、胎土に砂粒を殆ど含まない精製品で贖入品と思われる。3・4は高杯の胴部片。5・6は椀状の胴部にやや短く外に開く口縁部を付す小型鉢で、5には石英が含まれる。7は三角形鉄片で8は鉄線の基部片と思われるもの。9・10は4面使用の砂岩製の小形砥石で手持ち用と考えられ、9は全長10.8cm、中央部幅3cm、厚さ1.9cm。

出土土器は古墳時代前期中葉でもやや古く誤かれ、本整穴もこの時期の所産と見做される。



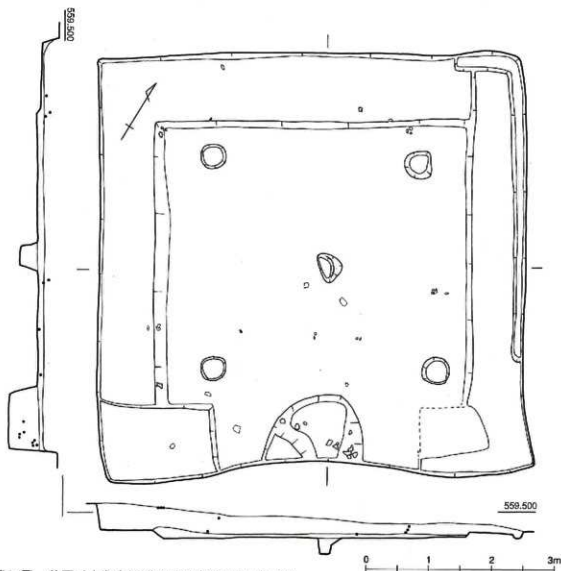
第30図 仏原千人塚3号整穴出土遺物実測図2 (7・8は2/3、他1/3)

4号竪穴（第31回）

1号墳の前方部北側コーナーの東側約2mにあり、6.8×6.8mのほぼ方形に近いプランを示す。南壁側中央部の土坑とその左右を除き幅0.5m、高さ0.1m余りのベッド状遺構がやや低いながらも比較的丁寧に造られ北東隅部は段が付き、南西隅部には一段高い長方形のベッド部が形成される。壁溝は東側に部分的に浅く設けられるのみで全周しない。床面積は42.3m²であり中規模の住居跡に入り、4基の中では最も大きい。南壁に接して基部幅1.6m、長さ約1mの平凹状を呈する二段掘りの大形土坑が設けられる。土坑基底部までの深さは約0.5mと深く、内部から土器片が数点検出されたがいずれも小片であり出土状況に変化が見られないことから埋戻しの際の混入と考えられる。中心部に隅丸三角形の二段掘りのか跡が設けられるが、二段目の掘込みは本来の炉とは性格が異なると考えられるが3号竪穴同様その目的は明かではない。

主柱穴は4本で各々の心距離は約3.4mで一定し、ベッド状遺構の配置と共に高い企画性が窺える。各柱穴に明瞭な抜き取り痕跡は確認されなかったが、上面がわずかながら変形するものも認められ土柱は抜き取られた可能性が強いものと思われる。主軸方位はN-61°-Eとなり1号竪穴に近い。内部からは土器等の遺物が検出されたが、土器に大形片は無く祭祀を窺わせるものは確認されなかった。

第32図1は緩く外反して開く箕の口縁部片、ハケを主副壁とするが胴部内面にミガキを加え胎土に角閃石や

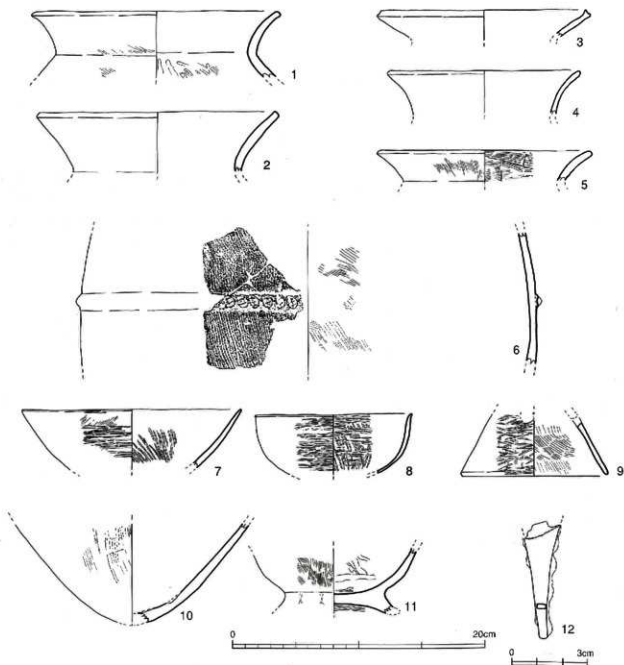


第31図 仏原千人塚古墳群4号竪穴実測図 (1/60)

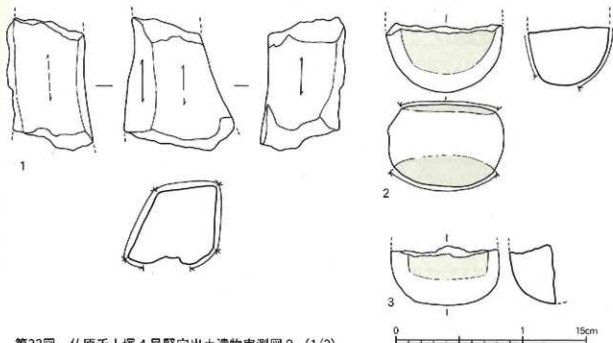
灰色粒を多く含む在地系土器。2・4・5も在地系甕の口縁部片で胎上も同様である。3は口縁部内側を肥厚させる外來系甕の口縁部片であり、金雲母をやや多く含む。6は大形の複合口縁甕の胴部片、やや長胴の胴部にベルト状の刻目突帯を巡らすもので在地系と思われる。7は口縁部が内反気味に開く高杯の口縁部で外面はハケののち横のミガキ、内面は斜めのミガキを施す。胎土に砂粒をあまり含まない精製土器である。8は丸い体部からはぼ直立する口縁部に続き、口縁部は短く外反する椀であり、内外面とも丁寧なミガキによる調整。精製胎土を用い、口径12.5cm。9は臺台の脚部で四方に凹孔を穿つもの。10は壺の底部と考えられ、11は高台状の脚部を付す鉢の底部で内面にミガキを施す。

12は圭頭式鉄鉢の基部で現存長4.8cm。第33図1は砂岩製の砥石で長軸方向の4面を使用する。2・3は安山岩を利用した磨石。

出土土器が少なく時期決定にやや躊躇するが、古墳時代前期前葉でも中葉に近い時期と考える。



第32図 仏原千人塚4号竪穴出土物実測図1 (12は2/3、他1/3)



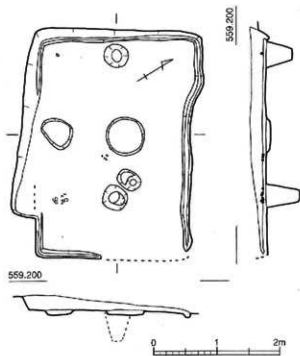
第33図 仏原千人塚4号竪穴出土物実測図2 (1/3)

5号竪穴 (第34図)

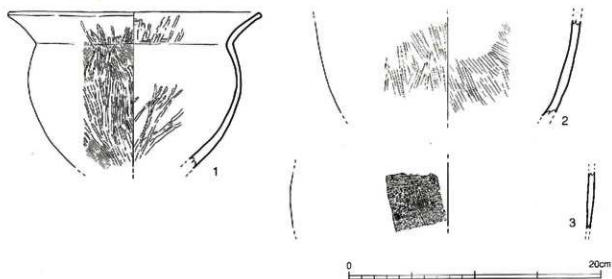
4号竪穴の北東約2.5mに位置する小形長方形の竪穴で、南～東側は削平のため部分的に消失する。また、西側に突出部が認められるが、これは埋戻しによるものと思われる。長辺約3.6m、短辺約2.5mの長方形プランに復原され、壁溝は部分的に途切れる。ほぼ中央に直径0.6m、深さ0.05mの浅い円形の土坑が、その南西に長軸0.5m、深さ0.05m余りの不定形土坑が認められる。出土遺物も皆無であるため、2

基の土坑の性格は明かではないが炉跡とは異なるものである。主柱穴は中軸方向に検出された2本で、方位はN-57°-Wとなり前述の各竪穴とは一致しない。床面積は7.26m²と小さいことや内部施設・構造から住居の付属施設と見做されよう。

出土遺物も少ないが、第35図1に示した鉢は南側主柱穴の西部床面から纏まって検出された。これは竪穴埋戻しの前に行われた祭祀に用いられ、使用の後に細かく砕かれ内部に溜められたと想定されるものである。底部周辺を欠くが脚付の鉢と考えられ、外面はハケのちミガキを加えるが底部付近にはケズリが残る、内面はナデとやや雑なミガキによる。胎土は在地系で口径20cm。2・3は甕の胴部片であり、調整はいずれも縦方向のハケによるが3の外面には横ハケが見られる。



第34図 仏原千人塚古墳群5号竪穴実測図 (1/60)



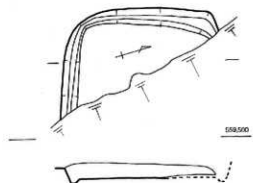
第35図 仏原千人塚5号竪穴出土土器実測図 (1/3)

本遺構は鉢の器形・調整から古墳時代前期前葉に置かれ、3・4号のいずれかに付属する施設と考えられよう。

6号竪穴 (第36図)

4号の南東約3mに位置する小形の竪穴であるが、東半部分は水田造営時に大きく削り取られ全体規模や構造は不明である。現存西側辺(短辺)は2.2mを測り、5号竪穴とほぼ同じ規模をもつものか。晩清が巡るが柱穴や土坑などの施設は確認されなかった。

遺物も皆無であり所属時期についても明かではないが、3又は4号竪穴の付属施設と推定されよう。



第36図 仏原千人塚6号竪穴実測図 (1/60)

第三章 総括

1. 古墳群と集落

仏原千人塚古墳群は、標高557～562mの小丘陵に営まれた前方後方墳（1号墳）と前方後円墳（2号墳）各1基と約50基の集団墓を中心とする遺跡である。また、1号墳の前方部周溝内部には木棺墓1基が形成され、2号墳のくびれ部には大形木棺墓2基と前方部に1基の小形木棺墓が営まれている。両古墳の東側斜面には4基の竪穴住居跡とこれらに付属する小形竪穴2基が設けられ、3号竪穴の北西部からは2基の土壇墓が検出された。集団墓は2号墳の北東部の浅い谷に帯状に分布するが墓域を区画する施設は検出されなかった。また、1号墳と2号墳の間には約25mほどの空間があり、ここに方形周溝墓が2前後基存在する可能性がある。古墳や集団墓・竪穴などの遺構はいずれも古墳時代前期前半に属し、これと同時期の大規模集落跡であり本古墳群の造営にあたり密接に関わったと判断される都野原田遺跡は北側の一段高い尾根上に隣接すると共に周辺にも当該期の中小の集落跡が点在し、まさに集落と墳墓が一体として検出・調査された希少なケースとなる。

都野原田遺跡では全長約400m、最大幅約150mの細長い楕円状を呈する尾根の緩斜面に、弥生中期から古墳時代中期に及ぶ住居跡等の竪穴が250基確認された。これに加え、約50基からなる集団墓や並立建物7棟、小児塚、集落を区切る条溝などの遺構が検出され、当地域では最大規模の集落跡であることが判明した。そのピークは古墳時代前期中葉であり、50基以上の竪穴が同時存在していたものと考えられている。各竪穴からは土器を中心に各種の鉄器や石器が検出されたが、石銅片2点や朝鮮半島の土器の模倣品（蓋）など注目される遺物も出土している。また、木棺墓を中心とする集団墓の形成は弥生後期後葉に遡る可能性を有するが、活発化するのとは古墳時代に入ってからであり前期後半には終了したと思われる。集落跡と古墳群の集団墓の関係については後述する。果下において前期古墳とその造営主体と考えられる集落跡が同時に発見・調査されたものとしては初例であり、遺跡の重要性・希少性から原田遺跡の約6割と本古墳群の保存処置が関係各機関の協議により取られた。一方、古墳時代前期の台地・丘陵上に立地する集落遺跡は大規模集落跡である都野原田遺跡のほか、一時期十数棟からなる中核的集落跡として小城原遺跡と板切第Ⅱ遺跡が知られ、これらの周辺には原田第Ⅲ遺跡・トグウ遺跡・花立遺跡・上城遺跡など一時期2棟前後の小集落跡や6～8棟からなる集落跡の存在が確認されており、このような規模の集落跡はさらに複数点在するものと思われる。また、東に隣接する直入町三反山遺跡でも10基の竪穴が確認されており、当地域全体の住居跡の軒数は古墳前期においては少なくとも一時期100基を超えるものと推定される。古墳中期以降、丘陵上の集落は激減するが市川などの河岸段丘部とその周辺に中・小規模集落が点在することはほぼ確実であり、奈良～平安時代に至るまで集落跡の大きな断絶がないことは第Ⅰ章で述べたとおりである。

集落の内部に形成された集団墓は、都野原田遺跡で51基、小城原遺跡で約10基、原田第Ⅲ遺跡で約10基、トグウ遺跡において12基が各々検出されている。その数でも都野原田遺跡が突出しているが集落の内部に集団墓が営まれることは当地域では一般的現象と言えよう。都野原田遺跡の集団墓は直径約30mの円形の墓域の中に大きく3群に別れ、各群は並行する成人墓（木棺）2基を基本単位としその周辺に小児～成人墓数基が2～3世代に渡り造営されている。この他の遺跡では明確な複数の群の存在は認められず、1群の集団墓が帯状に展開する。各墓には集落内の有力構成員とその血縁者が選択的に葬られたと推定され、他の遺跡の集団墓においても同様に理解されよう。また、小城原遺跡では集団墓とは離れた位置に石棺を主体とする方形周溝墓1基とこれに付属する木棺墓（3基）と土壇墓（1基）が、中原遺跡では一辺約20mの規模をもち石棺を主体とする方形周溝墓1基が集落の外に単独で形成されている。そして集落内の集団墓や方形周溝墓の上位に位置する高塚域として仏原千人塚1・2号墳が存在する。これらを整理すると、基本的には集団墓・方形周溝墓→墳丘部・階層構造が示されていると言えよう。そして、集落の内部に集団墓と方形周溝墓の両者が営まれた小城原遺跡は有力集落（集団）と中小集落（集団）間の差を、集落内部の集団墓と古墳群の集団墓は選択原理の違いを各々表している

と理解される。また、集落内方形周溝墓と単独存在の方形周溝墓、さらに未確認ではあるが古墳群内の方形周溝墓についても階層差又は異なる原理による造墓が考えられる。県下においてこれと類似する現象は宇佐市川部・高森古墳群と集落跡である小部遺跡に見ることができる。ここでは集団墓は検出されていないが、古墳群と集落跡の両方に複数の溝を共有する方形周溝墓が各々同時に存在することが確認されており、異なる遺状・埋葬原理に基づくものと思われる。いずれにせよ集団墓と方形周溝墓、そして前方後方墳・前方後円墳などの高塚墳との各々のヒアタスは大大きく、ここに時代とその社会構造の「典型を窺うことが可能である。

また、その造墓主体とも言える都野原田遺跡から見下ろす位置に形成された理由の一つには、この時期の幹線交通路との関係が考えられよう。後の奈良時代には豊後から肥後に通じる阿蘇路が整備され当地域に直入駅が置かれるが、駅や郡衙との関連性を強く示す道跡・遺構は古墳群の東側1~1.5kmに集中して存在する。この周辺に阿蘇路が通じていた可能性は高く、さらにここからは豊後道の荒田駅や由布駅へも通じていたことが想定されるのである。そして、これらの路は奈良時代に突然に整備されたのではなく源は弥生・古墳時代に遡り、交通路の掌握は内陸の在地首長にとって重要な意味を持っていたと言えよう。

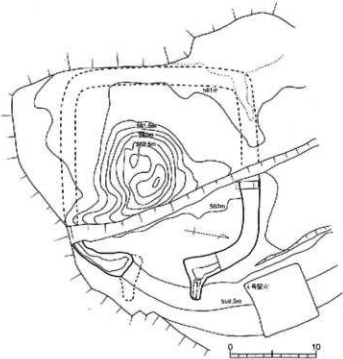
一方、弥生時代後期後葉以降の竪穴の増加と軌を一にする人口増加や七器等の遺物に認められる交流・交易の「層」の活発化、豊富な鉄製農具とりわけ久住型手鎌に見られる独自性とその背景に想定される農業生産の拡大及びその後の継続性の高さなどの諸現象・要素は、ここに出現した前方後方墳と前方後円墳が竹田市七ヶ森古墳群のような特異性を決してもつものではないことを物語る。また、高塚墳の出現には外的要因だけでなく、在地における有力勢力の成長とその支配権の確立を目指した内的要因にも注意する必要がある。

2、古墳群の成立と展開

仏原千人塚1号墳

北から南に延びた尾根の最先端部に位置し、尾根筋と直交して造営された前方後方墳である。調査により検出されたのは後方部東側から前方部にかけて巡らされた周溝部分であり、墳丘部分は削平により完全に消失する。前方部東側の周溝は短く突出して「ハ」字に開き、くびれ部で屈曲し後方部へと続く。後方部の溝幅は約2mで内側は比較的緩やかな傾斜を示すが外側は急角度に掘込まれ、深い部分で約1.3mを測り断面は逆台形に近い。前方部周溝の床面はくびれ部より約0.5m高くなり、その先端には後に木棺室が形成される。周溝に設定した第Ⅰ~Ⅲトレンチからは完形土器敷点を始め木古墳の築造年代を知る資料を得たが、第Ⅰトレンチの後方部周溝の残りは浅く前方部側の溝は消失したことは前述したとおりである。

一方、第Ⅰ・Ⅱトレンチにおいて検出された後方部東側の両コーナーの直線距離は18mを測る。その中心点と直交するラインを主軸と仮定し、調査により検出された後方部北側の周溝ラインを併せると後方部の規模が復原可能となる。その結果、第37図に示すように後方部の一边は約10mに、前方部の長さは約5.5mに復原される。これは、現状墳丘測量図と地



第37図 仏原千人塚1号墳復原図 (1/400)

形の限界にもほぼ合致し、本前方後方墳の全長は約26mに主軸方位はN-75°-Eと判断して大過ないものと考えられよう。また、墳丘については主躯体周辺約10mの範囲に高さ約1.5m前後しか残らずその復原は困難であるが、後方部は二段築成と思われる身石は持たない。空掘坑とその周辺に石材が全く確認されなかったことなどから主躯体は木棺直葬と想定される。なお、前方部周溝の木棺墓に伴う副葬品は無く被葬者は成人女性か。

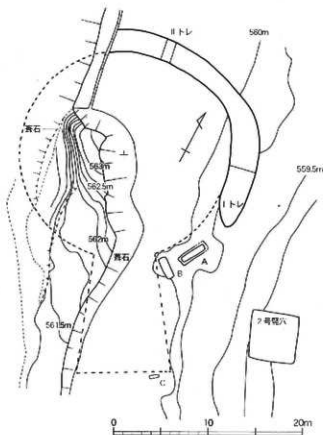
周溝出土の土器には複合口縁壺・甕・椀・大小の長頸壺・山陰系小形三重口縁壺・小形丸底甕等の器種が認められた。これらの中には新しい様相を示すものも一部存在するが、複合口縁壺や山陰系三重口縁壺及び大小の長頸壺等は古墳前期前期葉でもやや新しい時期と考えられる。これは都野原田造墳がピークを迎える前段階であり、製塩土器や石銅等の新たな文物が流入する時期でもある。また、第Ⅱトレンチからまとまって出土した完形に近い甕1点と口縁部を打欠く2点の椀は、古墳の祭祀において食物供献及び飲食儀礼が行われたことを想定させるものであり、甕には煮炊きを使用した痕跡を明瞭に示す。第Ⅲトレンチ出土の土器の中で小形壺2点にはススの付着が認められたほか、小形長頸壺2点の底部には穿孔が1点には口縁部の打欠きが認められ、穿孔や打欠きは祭祀終了時の行為であることを窺わせる。

前方後方墳としては小形ではあるが、県内では最古例となるもので九州内でもほぼ同時期としては福岡県那珂川町の妙法寺2号墳を始め、夜須町焼の峠古墳、福岡市部木1号墳・京ノ原古墳、鳥栖市赤坂古墳等の約10基が知られるに過ぎないようである。1号墳の主躯体は未調査であるため被葬者の性格を含めた詳細は明らかにし難いが、本地域において内陸交通・交易を掌握し、大分川下流域等の支配層や時の政権とも深い関わりを持ち得た在地首長が自らの権力確立の象徴として造営したものと考えられよう。

仏原千人塚2号墳

1号墳の北側約35mの尾根上にあり、1号墳と主軸をほぼ直交するように造られた前方後円墳と考えられる古墳である。土取りのため主躯体を含め墳丘の大半を消失し、現存するのはわずかに西側後円部からくびれ部にかけて部分的に残るのみとなる。調査により検出された遺構は、後円部の途中から始まる周溝とくびれ部に比定される位置にあるA・B号2基の人形木棺墓、前方部の先端と考えられる所に形成された小形木棺墓1基(C号)に止まるが、これらの遺構から以下に述べるように全長約35mの前方後円墳に復原される(第38図)。

周溝は幅2.2~3.2m、深さ約1mのU字状に近い断面をなし、北側から延びる尾根を切断するように半円形に巡るが調査区西側側は切通しとなり終息すると考えられる。円弧から復原される後円部の直径は約22m。周溝内部には人頭大の身石や墳丘盛土が転落しその上には黄灰色火山灰の堆積が観察され、古墳造営後のまもない時期に九重火山の噴火とこれによる墳丘崩落があったことが推定される。周溝からは複合口縁壺と甕が検出された。甕の口縁部は1号墳出土の複合口縁壺に比べより直立することから、2号墳は1号墳に後続する古墳前期中葉の造営と見られる。



第38図 仏原千人塚2号墳復原図(1/400)

その後、周溝東側終息部の延長上にA号木棺墓が、その南側にはA号と主軸を直交するB号木棺墓が営まれていた。全長は約3mと2.5mを測り木棺墓としては最大であるとともに、A号の組合せの石枕やB号の板石を用いた小口板などその規模・構造は集団墓に属する木棺墓とは大きな格差が認められる。そして、人骨が遭難しないことから性別決定は困難であるものの、土器以外の鉄製武器等の副葬品を保有しないことから被葬者は成人女性である可能性が高い。また、この2基の木棺墓は前方後円墳築造の後にその裾部に形成されたと考えられるが、両者が並行せず直交することとこれを取り巻く2本の等高線が東西両方向に突出することから、ここをくびれ部に比定した。その後、等高線は南東に並行して走りB号墓の南側約11mの所において、A・B号と主軸を全く異にするC号墓が等高線と交差する状態で検出され、この付近を前方部の先端にあたと判断した。C号墓は小児の椀型木棺墓でありほぼ床面まで削平を受けるが、両小口や側板の掘込全体に残る赤色顔料から棺全体に顔料が塗布された丁寧な造りであったことを示す。集団墓に属する小児墓に同様の構造は認められず、格差があることは先に述べたとおりである。なお、2号墳の前方部長は12m、先端幅は約10m前後と思われるが正確な墳形・規模等は今回の調査所見では明確にし難い。

2号墳が造営された古墳前期中葉の時期は、都野原山遺跡の集落がそのピークを迎えたと同時に本地域全体の竪穴数も最大に達する。その数は百数十基に及ぶが古墳前期後半以降は次第に減少し、中期になると丘陵部の集落は激減する。弥生後期末葉から始まる古墳前期中頃に頂点を見せ前期後半に終わる集住化現象については、時代と社会の緊張状態に基づくと考えられ、その頂点に達した時期に前方後方墳より上位に位置づけられる前方後円墳が引き続いて造営された意味は決して小さくないと言える。

3. 集団墓

2号墳の北東部は東に開く浅い谷により画され、その谷奥の標高約559.5～560mの緩斜面に集団墓は形成されている。各墓は南北方向に帯状に分布し、西側の平準面に墓が営まれないことや1号と2号墓の間には空白部が認められることは、この部分に1・2号墳に至る墓道が存在していたことを窺わせる。並行する2基を基本的単位としこの間隔に切り合いを避けるように後続の墓が形成されたと考えられるが、切り合い関係が認められるものも前時期の墓を大きく切らず最小限に止めていることから集団内における系譜関係を表していると考えられる。その主体部の中心は木棺墓が占めると考えられ、これに土壇墓が続く石棺墓は1基に過ぎないようである。また、内部調査は実施していないが小児椀棺墓と推定されるものも少数認められる。内部調査を実施した11基からその形成時期を示す確実な土器は検出されなかったが、6号墓出土の壺胴部片が弥生終末から古墳前期前葉に収まること、祭祀上坑とも考えられる21号墓北側の土坑が古墳前期中頃の火山灰に覆われていたことから造墓活動もほぼこの頃には終焉を迎えていた可能性があり、その時期も自ずと限られ半世紀程度の短期間と推定される。

各墓の分布から明確な群構成を把握するのはやや困難であるが、主軸方位の違いから大きくa・b・cの3グループに分けられ、これには時期差と集団差が考えられることは先に述べた。各グループは2～3世代に渡る造墓と推定され、時期差と考える場合でも部分的に重複する可能性が高い。従って、当地域の集落全体の中の系譜を異にする親族集団から選ばれた代表者が同時又は各々若干の時期差を持ちながらほぼ並行して葬られたと理解されるよう。調査を実施した全体の約2割にあたる11基の墓からの出土遺物はほぼ皆無であることから、土器の副葬・供儀の可能性は持つがこれ以外の武器等は副葬しないことを原則とするようである。被葬者の詳細は不明であるが、性別については手掛かりは若干あげられる。まず、都野原山遺跡の集団墓や小城原遺跡の集団墓と方形周溝墓等からは鉄剣が検出されており、その被葬者は男性である可能性が高い。さらに、墓守りの住居跡とも想定される3号竪穴に近接する1号土壇墓からも鉄剣が出土しており、これも男性と思われる。よって、集落内部の集団墓は男性を中心とする埋葬原理に基づく可能性が指摘される。これに対し、古墳群における集団墓の被葬者は鉄剣等の武器を保有しないことなどから女性を中心とする埋葬原理に起因すると考えることは飛躍に過ぎるであろうか。さらに、1・2号墳の被葬者や付属墓の被葬者も女性であるとすれば、本古墳群全体が母系の親

族原理¹³⁾に基づく造墓である可能性も示唆するものとごえよう。いずれにせよ、古墳時代前期の墳墓の埋葬原理や親族構造については人骨等の自然科学的分析が不可欠であり、ここではその可能性を指摘しつつ今後の資料の蓄積を持つこととする。

- 註1 宮内省編『都野町遺跡』2001 久保町教育委員会・大分県教育委員会。
- 2 平成9年度、久保町教育委員会により調査が行われ弥生中期から古墳前期にいたる墓穴約100基が検出された。この中で中心を占めるのは弥生後期であり、古墳前期の墓穴は約15基余りが確認された。
- 3 宮内省編・高橋信武編『板石遺跡群(第1～V)・小原田遺跡』1999 久保町教育委員会。板石第II遺跡では約20基がこの時期に営まれていた。
- 4 平成8年度、久保町教育委員会調査。古墳前期の墓穴は10基余り。
- 5 藤澤幸徳編『市第IV遺跡・トグツ遺跡・花立遺跡』2000 久保町教育委員会。古墳前期の墓穴1基。
- 6 註5と同じ。墓穴は2基。
- 7 平成9年度、久保町教育委員会調査。古墳前期の墓穴は7基。
- 8 渋谷忠孝・吉武宇編『三反田遺跡発掘調査概報』1985 久保町教育委員会。
- 9 赤塚古墳の西側には15基の方形周溝墓が溝を共有しながら二つの群を形成するように展開することが確認されている。大分県立宇佐県上記の丘原史民俗資料館『年報1987』1988。
- 10 赤塚古墳とはほぼ同時期の環状集落跡であり、内部からは住居跡や回廊と称される遺構に加え溝を共有する方形周溝墓2基が認められた。小倉正吾・佐藤真二編『肥後川流域遺跡発掘調査報告書』1986 宇佐市教育委員会。
- 11 奈良時代とその前後の時期の遺跡のなかで石田遺跡・上城遺跡・中城遺跡の3遺跡は半径500mの範囲内にあり、いずれも宮内省又は宮内閣関連遺跡と考えられる。
- 12 セツ森B号墳・岡C号墳の2基の前方後円墳を中心とする古墳群であるが、B・C号は共に古墳前期後半代と考えられている。岡古墳群の周辺には行井入口遺跡等の弥生後期末葉をピークとする集落跡が多数存在するが、古墳前期後半にはほぼその姿を消しこれらの集落に伴う墳墓の存在も明かではない。古墳の出現は余りに唐突であり、後続する古墳も現状では認められない。
- 13 沢田隆雄『妙法寺古墳群』1981 那珂川町教育委員会。
- 14 注15文献による。
- 15 長家伸『部木古墳群』2000 福岡市教育委員会。
- 16 山崎純男『京の歴史』1976 福岡市教育委員会。
- 17 斎藤祐博『九州の前方後方墳』『考古学ジャーナル』No.269 1986。
- 18 集落内部の主要構成単位の継承は父系であり、地域集団全体を代表する場合の継承は母系であるという考え方も成立し得ると言えよう。田中に指摘にあるように、少なくとも夫婦が埋葬の単位とはならないようである。
- 田中良之『古墳時代親族構造の研究』1995。岡「遷葬人骨による自給古墳時代の比較」『4・5世紀の日韓考古学』1996。岡「古墳時代親族関係の比較に関する予察」『福岡大学総合研究新報』第240号 2000。



弘原千人塚古墳群全景



1号墳と周辺の遺構



1号墳出土土器



2号墳A号墓出土土器



仏原千人塚古墳全景



同1号墳と周辺の遺構



同2号墳と周辺の遺構



1号墳（東から）



同周溝 I トレンチ

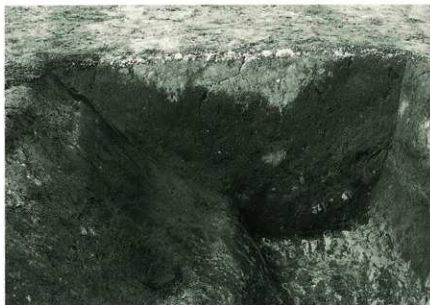


同Ⅱ トレンチ

1号墳第Ⅱトレン
チ周溝出土土器



同土層堆積



同第Ⅲトレンチ周溝





同第Ⅲトレンチ



前方部周溝内
木棺基



同土層堆積



2号墳全景(東から)



同第Iトレンチ周溝



同墓石と周溝内土層



同A・B号木棺と
周溝



同A・B号木棺基



A号木棺墓全景



A号墓石組枕



同副葬・供献土器



B号木棺墓全景（南から）



同C号木棺墓

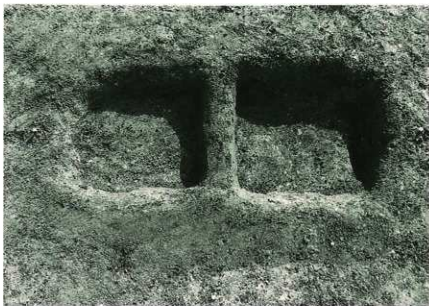


集团墓全景



1号墓

2号墓



5~11号墓



5·6号墓





7~9号墓



10·11号墓



13号墓 (石棺墓)

1号竖穴



同遺物出土状況



同完掘状況





2号竖穴遺物出土状況



同完掘状況



3号竖穴遺物出土状況

同



同完壙状况



1·2号土城墓





1号土坑墓基鉄
剣出土状況



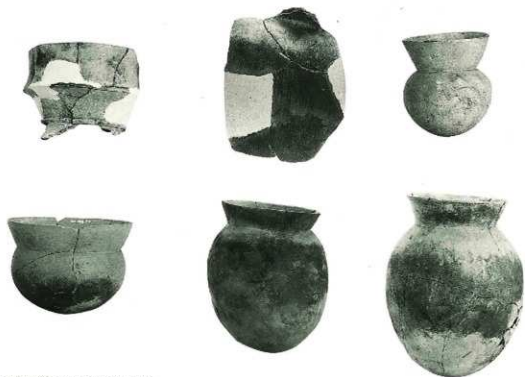
4号竖穴遺物出
土状況



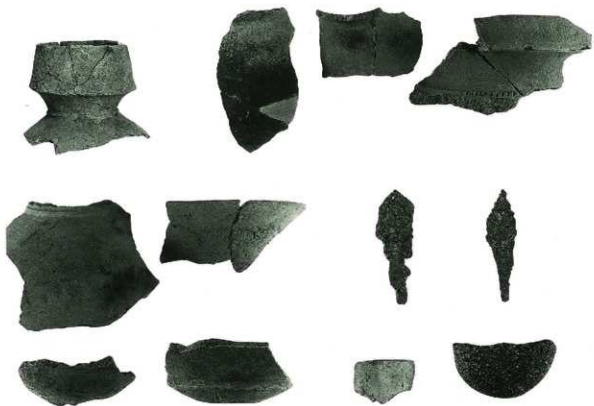
5号竖穴完掘状
況



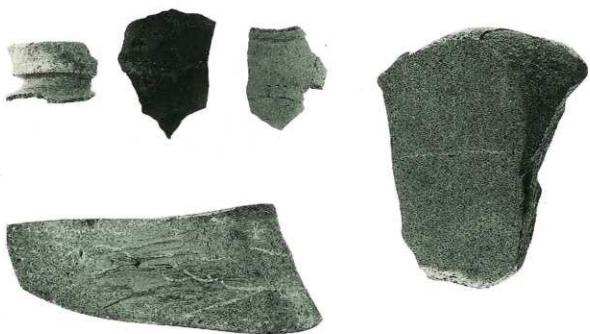
1号填周满出土土器



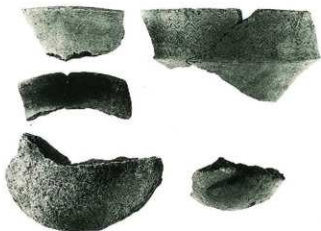
2号填周满·A号墓出土土器



1号竖穴出土土器·鉄器·石器



2号竖穴出土土器·石器



3号竖穴出土土器・鉄器・石器



4号竖穴出土土器·石器·铁器



5号竖穴出土土器

1号土坑墓出土铁剑

報告書抄録

フリガナ	ブツバルセンニンヅカコフング
書名	仏原千人塚古墳群
副書名	県営担い手育成基盤整備事業郡野東部地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	VI
シリーズ名	大分県文化財調査報告書第131編 久住町文化財調査報告書第10集
シリーズ番号	
編著者	宮内 克己
編集機関	大分県教育委員会 久住町教育委員会
所在地	〒870-0021 大分県大分市府内町3-10 1 〒878-0201 直入郡久住町久住615-4
発行年月日	2002年3月20日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査機関	調査 面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
仏原千人塚古墳群	久住町大字仏原	4442(1)	新発見	33°4'20"	131°18'45"	1996.09.05~ 1996.12.25	5,500m ²	圃場整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
仏原千人塚古墳群	塚地	古墳	前方後円墳 1基 前方後方墳 1基 集団墓 51基 住居跡 6基	土器 石器 鉄器	古墳時代前期の首長墳と 集団墓

仏原千人塚古墳群

平成14年3月31日

編集 大分県教育庁文化課
発行 大分県教育委員会
〒870-0021
大分市府内町3-10-1
TEL 0975-36-1111
印刷 フタバ印刷

